

## 九

イブセンの影響なるものはローマンス語の諸國、チユートン語の諸國並にスラヴ語の國に一貫して殆ど計り知られざる程多大であつた。このイブセン主義はまたスペインにまでもその特色を押し廣め、智力上の疫病の如き有様をなした。恰も第十六世紀の末葉第十七世紀の初に於て文學上の矯飾が病的に流行したが丁度その様であつた。その特徴と云ふのは比喩を濫用する事、普通の顯象を不思議に解釋せんとする傾向、その矛盾、その逆説並に婦人の崇拜等である。殊に最後の婦人の崇拜に至つてはかのワグネルの婦人に對する極端な崇敬と相待つて好一對をなすのである。併しイブセンの戯曲は之を健全なる正當な批評に照らして見れば、近代的男女の立派なタイプとなるべき人物を示して居ると云ふ事並にその作中の人物ノラ、ソルネス、ヘッダ、ガブラー、オスワルド、ブランド、ストックマン(Nora, Solnes, Hedda, Gabler, Oswald, Brand, Stockman)等は常に不安の情に逐はれて居る個人主義の人を明確に示したものであり、又自由に對する無限の希望及び神秘主義の一面と道德的神経病とを示して居るものであると云ふ事は決して

て忘るべからざる事である。

斯くの如くにして戯曲の革新の先づ行はれたのは北方即ちノルウェーにあつた。それは即ち舞臺の上に日常生活の普通な事件をその儘に顯はしたのである。これは往、所作のないといふ事並に動機及び舞臺上のきまめを缺いて居ると云ふ批難を受くべきものであるかも知れぬ。なほ茲に附け加へて云つて置くが、現代の作物は小説でも詩でもみなノルウェー及びスウェーデン詩人の特徴である。不安な陰鬱な趣を反映して居る。現代のスカンディナヴィアはイブセンを出し、ビヨルンソン(Bjornson)を出し、オラ・ハンソン(Ola Hansson)を出し、更にストリンダベルヒ(Strindberg)を出し、實に文學史上その比を見ざる程な盛運に際會して居るのである。なほ北歐の詩人に就ては最近に歐洲社會の評判になつた人々を挙げなければならぬ。少くともロシアの作家マキシム・ゴルキーとマリ・コノプニカ(Maksim Gorky, Marie Konopnicka)を挙げなければならぬが、後者は才氣ある女詩人で前者は下層社會の研究を文學の内に紹介したものである。なほ又吾人はポーランドの小説家エリゼ・オルゼスコ(Eliise Orzesko)を挙げなければならぬ。これは他愛主

義を極力發展させた人である。

十

現代の事に就ては吾人の前に饒多なる材料が並べられてある。吾人はその内何れに就て何を云ひ、何れを捨て、置くべきかを知らぬ。只吾人は今少し充分にロシア思想の發展に就て説かなければならぬ。何となればこれ迄ロシア文學に就て述べた處は只其外形に過ぎないのであつたからである。抑此ロシア思想の發達はトルストイ主義の感化と見る事も出来る。何となればトルストイの思想はダーウソンの思想の如く近代思想の最も有力なる要素で有つたからである。尚ロシアの事に就て考へるならば、吾人はオストルウスキ並にアレキシス・ポテッキン (Ostrowski, Alexis Potieckine) の一派が戯曲の上に導いた革新の事を記憶して置かなければならぬ。殊に又小説家の材料たるべき多大な事實のある事にも注意しなればならぬ。その材料と云ふのは即ち現代のロシアに於ける重大なる難局例へばその民人の自由に対する熱望、正義に対する向上の念、若くは將來に於ける争亂の前驅とも見るべき内部の混亂激動是等はみな小説家の慧眼に觸れ

てその材料となるべきものである。而も是等はロシアと云ふ一大社會的團體の能力から必然に起つて來たもので、殊に是等の難局は一九〇四年の日露戦争の爲めにその起りを早められたものである。而してロシアの小説家は國家がまだ是等の難局が實現されない内からその筆を執つてそれを預言して居たのである。由來ロシアの小説家は明確なる指導の下に農奴の開放されて以後續いて起るべき大進歩に力を致したものである。彼等は過去半世紀間批評家が推讃した原理原則を信用し、之を案内としてその取るべき方針を定めたのであつた。その批評家に就ては特にチュルニチュグスキ、ドブロヴリウボヴ、ピサレフ、ミカイレヴスキ (Tchernichevsky, Dobrovloubov, Pisarev, Michailievsky) の名を挙げなければならぬ。是等の人々は藝術の爲めの藝術に代ふるに極力人生の爲めの藝術を唱導した人である。

尤も最近の文人の内でも此ロシア思想の一般の進歩の爲めに影響されずに居るものもある。蓋しそれ等の人の内にはメレジコフスキ (Merejcovsky) の如く文藝復興期若くは希臘ローマ時代の事に潛心して居るものもあれば或はミンスキ

一(Minsky)の如く音律の發展を樂んで居るものもあり、また最後に至てはベルモント(Belmont)の如くシムレーの衣鉢を傳へたもの、又イヴァノフの如く精巧なる新ギリシア主義に私淑したのもあつたのである。

斯くの如き文人等は所謂普通の公道以外を歩んで居た連中である。彼等の文學はチホフ、ザラシエフ、チルコフ、ゴルキー、コロレンコ(Tchekhov, Verassiev, Tchirkov, Gorki, Korolenko)並にアンドレーフ(Andreev)の如き人の誇りとして居る國民教育の事業とは何等の係りもないものである。こゝに注意すべきはジュール・ヴァレス(Jules Verles)と云ふ人である。此人は社會主義並に放浪生活に烈しく反對した人であるが、一八六六年にその痛快なる文字を以て「抗命の民(Refractory people)」と云ふ不思議な本を書いた。

更に又自然派の最後の代表者は出來得る限り精密に、從來之を研究する價なきものとして放棄されて居た人類同胞の内、最も悲酸な状況にあるものを取り扱つて居た。此派の小説家が扱つたものは製造場に働く工人若くは勞働者農夫の類で、それ等の多數はこれ迄自分等が幸福を享くる資格あるものであるか否か

と云ふ事さへ考へて居ない位閑却されて居た人々である。是等の賤民は彼等小説家の以前若くはトルストイ以前には知られなかつた文學的材料であつた。彼等に關するものは之を稱して賤民の文學と云はれて居る。是等の文學を極端に持つて行つたものがゴルキーである。尤もゴルキーよりは以前にフランス文學が放浪生活の文學と稱して既にゴルキーの扱つた様な材料を小説に用ひては居るが、ゴルキーの扱つたそれ等放浪の民は放逸自在の民で、自然その儘の野性を有し、世間には到底容れられない人民である。是等の類に屬する小説にはゴルキーのオン・ゼ・ステップ(On the Steppe) アンドレーフのゼ・ガルフ(The Guld)と云ふのがある。

斯くの如く全然民主的文學の出るにつけて、吾人はロシアなる大國民がこの壓抑を脱し、智的進歩の道程に一步一步向つて行くのを認める。さうして又その勢力が如何ばかり力あるものであるかを知らないで、屢、その試をなし、又人間の存在を出來る限り良くなさんが爲めに、彼等國民は最も良き方法を探らんとするその試験をなして居る事を認めるのである。

繪畫の後の方に影の如くぼんやりした朦朧たる姿が見える。吾人は良心の不思議に混亂した有様を見る。それは云ふまでもなく心靈の苦悶、熱したる想像の苦痛、心理的煩悶並に心を迷はす悲哀等に外ならぬものである。斯くの如き状態は即ちロシア社會の徐々としてその最後の運命に達せんとする不安の有様を示すものである。それは恰も半透明な霧の如き状態である。假令其處には文書に對する政府の檢閲なるものが現はれはするがそれにも拘はらず、困難と貧苦とに充ちたる生活状態、過去現在の悲哀單純にして無智なる多數の人民の希望と向上心とを壓抑する惨狀が、なほあきらかに文學に映じて居るのである。一、言明瞭に云へば如上の民主的文學の平面にはロシア政府の壓抑が加はるにも拘はらず、實際に人民の困難なる生活状態が陰氣に薄暗く顯はれて居ると云ふのである。

ロシアから一步轉じて吾人はチェク(Czech)思想の發展に就て一言しなければならぬ。無論これはロシア思想に比較して、その深遠な處、有力な處、遙かに及ばぬものではあるが、なほ注意に値すべきものである。其注意すべきと云ふはボヘミア

の興起と云ふ點に關係ある爲めである。即ちボヘミアはその文人のお蔭でその言語と國民的精神の獨立を再び確定したのである。從來ボヘミアは十七世紀十八世紀の間カソリック教の爲めに壓抑せられて居たが、十九世紀の前半の間にはジアン・コラー、ラヂイスラフ、セラコウスキ、ウヰンツェル・ハンカ及び學者のサファック(Jean Kollar, Ladislav, Celakovsky, Wenzel Hanka, Safarik)など云ふ人の著作に依つて其古の自由なる傳説を現代に維持して行く事が出来た。其後一八四八年以後になつて漸くヨセフ・フック、ネルダ・ヴィスラフ、ハレンク(Joseph Fric, Neruda, Viteslav, Ha-leck)等のローマンチック派が起り、バイロン、プーシキン、シンキウイットの跡を逐ひ、ボヘミアの濱に快き音樂の聲を擧げるに至つた。斯くてボヘミアは從來壓迫されて居たオーストリアの手を離れ、その文學も言語も獨立したものと成つた。そしてブラグの市は再び獨立した智力活動の中心となつた。それと共に幾多の文人も輩出したので、かの多種多様な才能のあつたと云ふザイヤー(Najer)の敘事的なる、ヤロスラフ・ウルクリキー(Jaroslav Vrchlicky)の休みなき勤勉の如き、また全然スラヴの性質を帯びたチェク・ヌヴァトブルック(Czech Dvobojnick)の如き人々は

ボヘミア國民の眼から見れば歐洲列國の大家と比肩すべき人と思はれたであらう。特に小説家のカロライン・スヴェイトラ(Caroline Světlá)〔トサロヴァ夫人(Madame Musakova)の事〕の如きはボヘミアのジョージ・サンドと云ふ稱號を受けるに足る位であつたと云ふ。チシク文學に於ける最近の人々の内にはチシクのスコットと云はれた「過去の炬火」(Torches of the Past)と云ふ小説の作者シマチシク・アロイス・ジラセック(Simacek Aloys Jirasek)心理解剖者なるクロンハッセル(Kronbauer)並に世界的文學に熱心なる小説家で又批評家なるヴァクラフ・ブラディック(Vaclav Bradik)など云ふ人々がある。

上記チシクの文學の起つた處即ちボヘミアの地は所謂大ロシア精神がその勢力を擴張せんとして居る其範圍に屬するのであるから、同じ勢力範圍に屬するセルヴィア及びブルゲリアの文學に就ても一言する必要があると信ずる。此兩國は最近に於て學校新聞の増加並に科學の研究に就て急速の進歩をなして居る。其ヘルグラード、ソフィア、ベリグラッド(Belgrade, Sofia, Philippopolis)等は七八十年前まで野蠻な村落であつたのであるが、今日では學藝の中心になつて居る。而して最

近に至るまでそれ等の言語と云ふものは只混沌として歴史的連絡もなき有様であつたが、今や過去を顧みてその國詩の寶庫のあるを誇り、それが永い間邦國の風俗習慣並に信仰と共に足並を揃へて來た事を喜ぶ程になつた。かくの如くにして古の言語は復活され、それが國々の各州に用ひられるやうになつた。幸にしてまたセルヴィアとモンテネグロの獨立に依りそれが東歐に於ける一國語となつたのみならず、又其文學を復活せしむる機關ともなり、セルヴィア詩人の立派な著作にまで用ひられるやうになつた。セルヴィア文學は十五世紀から十七世紀に亘つて榮えたもので、その間にはデルジチ(Deržić)と云ふ詩人や、また後になつてはジョン・グントリツ、バル・マチツ(John Gundulić, Pal Matić)等が出た。又ゲーテは十八世紀に於けるミルチノウィチ(Milutinovič)を以て東方に於ける自分の繼承者だと云つた事がある。さて一八三〇年頃に當つてスラヴの地に大變化があつたが、これが此文學に著しき刺激を與へた。即ち此時クロアシアの民はセルヴィア語を以てその公文及び公用の言語と定める事にしたのである。爾來ブーシキンに比較された戯曲家のデーメーテル(Demetar)ハリッドに名を得たルブロッツシ

(Lubotitz) 其在世の時からクラシックの名を得たオストラジンスキー (Ostrajinski) 其他シマ・ミロチノグイッチ、スポチッチ、シマシヨヴァン・シヨヴァノウイッチ (Sima Milotinovich, Subotitch, Zrnaj-Jovan-Jovanovich) など、が顯はれ、セルヴァニア語の勝利をば確定したが、これに依つてセルヴァニア語は語原學上並に文學上の統一を得た次第である。更に十九世紀の終りに於けるギリシア文人の努力を瞥見するのは頗る興味のある事であらう。彼等ギリシア人はその最も古い最も光榮ある歴史を持つて居るのであるから、素より其力量を自覺し、又その自由を得るや直ちにその運命を開拓せんと欲したのである。彼等はその自覺を得るやその國語に就て互に争ひ始めた併し其争ひは偶、國語を進歩させ完成させる役に立つたのである。抑、ギリシアの現代の詩人なり小説家なり若くは批評家なりは、何れもその近代の題目を取り扱ふに古のシューシディデス若くはクセノフソンの用ひた國語を以てするのであるから、如何にかれ等は得意に感じた事であらうか。

斯くおしなべて各國の文化を見たが、吾人はなほ一つ大事なるものを殘して居た。即ち十九世紀に於けるハンガリアの甚しき智力的復興である。ハンガリアの古

文人にはヴェレスマルテ、ベトエフ (Veresmarfy, Petöfi) 等があつたが、近代に於てはチキド、チー、エオトヴヌス、ヨイカイ (Czida, Döczy, Eötvös, Jókai) 等の名が著しくある。

抑、十九世紀以來米國及び歐洲の如上の驚くべき開發に對して東洋諸國の興起を比較する事はあまりに突飛な事であるが、猶日本の如きは非常な發達をなして居る。殊にその出版業者の如きは、その書物を出版する事世界第一と云はれて居る程である。その書物は常に數量に於て勝つて居るのみならず、遠く外國にまで行はれ、現にイギリス、フランス、ドイツ、イタリアの諸國に翻譯されて居る。東洋の事に就ては新トルコに就て一言しなければならぬ。これはトルコのヴァルテアと呼ばれたアーメッド・ミダット (Ahmed Midhat) と其徒弟ナディ (Nadi) 並に詩人ケマル・ベー (Kemal-Bey) を以て始まり、ハリッド・チア (Halid Zia) に依つて繼續されたものである。

なほ南アメリカの内メキシコには歐洲の詩人と比較され得べきナジャラルゴネスマ、ダリオ (Nojara, Lugones, Dario) 等があり、轉じてキューバにはカーライルに比較さ

るべきヨセ(José)がある。

最後にはブラジルの文學がある。其十九世紀の文學は三期に分れて居て第一期には詩人のゴンカルヴス・ヂ・メイス(Gonçalves Dias)歴史家のアントニオ・ホンリタ・リアン(Antonio Henriques Real)新聞記者リスボア(Lisboa)ブラジルのヴァーシムと呼ばれたオテロ・メンデス(Otéro Mendez)があり第二期にはアルメーダ・ブラザ(Almeida Braga)戯曲家ヨアキム・セラ(Joachim Serra)小説家サバ・ヂ・コスタ(Sabas de Costa)抒情詩人フランコー・ヂ・サー・ヂ・メイス・カルネーロ(Franco de Sá, Dias Carneiro)があり第三期にはアセヴエド・マイガ・ルンヘス・ホーゴ・リアン、テオフィロ・ヂ・アズ・ヴェド(Vedó, Magalhães, Hogo Leal, Teófilo Dias, Correa)等が居る。

十一

二十世紀の進むにつれて智力の新方面が開け、歐洲及びアジアの新時代に適當する前代未聞の文學が顯はれて來た。東西各國相互の交通の容易になると共に思想も交換され、それが爲めに世界一般に通すべき萬國共通の精神なるものが起つて來た。

既に述べた如く各國の文學はそれ々々其歴史を有し、それを重大視する爲めに此世界共通の傾向は防遏されるやうであつた。併しそれにも拘らず其文學は互に合一する點を有し、知らず々の間に互に影響し合つて居たのである。縱し彼等はこの大勢に抵抗し、何れも其文學の自由なる交通に關して保護政策を執つて居るにも拘らず、色々な事件の起る毎にそれが互に融合せざるを得なかつたのである。

今翻つて吾人が上來述べ來つた近代の大勢を大別して見ると、それが凡そ三種になると思ふ。第一トルストイの影響で、これは各國各種の小説に其道德的見解、藝術的概念を印刻したものである。第二にはイブセンの影響、これは近代の戯曲なるものゝ動機として個人の良心の作用を入れなければならぬと云ふ事をノルウェー國內並に國外の脚本家に感銘させた。また第三はワグネルの影響で、これは其偉大なる藝術に依つて凡ての音樂愛好者を睡眠に陥らしめたのである。併し是等三人は既に過去の人である。今日我等の人より吾人に近いものを求むれば、ダムンチオ、キプリング、オリヴ、シユライナー、シンキウ、ツ並にエドモン・ロスタ

ン等である。又ブーデルマンは充分に近代のドイツ精神を以て染められて、又今日のドイツの思想を發揮して居るのではあるが、又其作中の人物には世界普遍的な人情を與へて居る。それ故に彼の人物は凡ての國に持て行つても了解され、又それが如何なる衣装をつけ如何なる言語を話しても差支ない趣を持つて居る。斯んな勢で歐洲の文學はアメリカの文學と相俟つて人道の文學たらんとして居る。共通の觀念は表面上全然その特徴を異にし、全然相反せる如き國と國との間にもなほ交通して居る。例へば個人主義はニーチ、キイプセンの教とは全く別にドイツに顯はれて居る。イタリアに於てはダメンチオが此個人主義を呼んで、存在の眞實なる感と云つて居るし、又スウィーデンの女詩人エレン・ケイ (Ellen Key) は之を以て選ばれた人々の道となし、人間をして更に偉大に幸福に、更に有用ならしむる立派な道に導くものだと云つて居る。其外此處彼處に個人的表白の極度になされて居る例を屢見するのである。此個人主義の主張は總て十六世紀の希望と一致するもので、これは丁度其當時かのイタリアの文藝復興の人道主義が成就せんと力めた處のものと同じである。只相違して居るのは現代の個人主義

には道德の要素が多く導入つて居ると云ふ點である。

個人主義と同じ様にトルストイの人道主義も各方面に擴がり極めて、物質的思想の上をまで侵して居る。昨日の警語は「理想化する事なく正確なる智識を得よ」と云ふのであつたが、今日ではそれが變じて熱情ある同情の感と云ふ言葉に代つてしまつた。今まで冷やかであつた心は同情、憐憫の情及び世界の同胞たる事の自覺といふ念を以て充されるやうになつた。そうして斯くの如き大潮流が小説脚本の力となつて居ると共に、一方には互に助け合ふと云ふ社會的問題が書物に依り新聞雜誌に依り盛んに唱へられるやうになつた。例へばマルクス、ラッサル、バクレー、シューマン (Marx, Lassalle, Henry George) の社會主義の如き、バクレー、スチルネル (Bakounine, Stirner) に依つて紹介された無政府主義並に各方面に起つた婦人解放の問題の如きは皆その發願である。斯かる有様より察して、吾人はその形こそ變化すれ又その種類こそ多けれ、凡てそれ等が集つて一體となり、世界文學をつくるものであると信ずる。蓋し將來は今日近代文化の海に帆を上げて走つて居る文學の特徴を更に明かに實現し得るであらう。今その特徴の一二を擧げ



て見るならば歴史的批評的智識の増加、藝術の科學的方面に對して興へられた必要の度、フランス、アメリカ、ロシア、ノルウェー等の小説の重きをなすと共に詩の衰運、但し其小説に於ては從來自我的精神の勝つて居たものであるが、それが發達して寛仁なる他愛的感情となる事、これ等が其特徴であらう。なほ又小説に於ても脚本に於ても一時一局部の事よりも人間普通の行動並に其情緒を以て主眼となし、社會的問題を取り扱ひ文學を社會化することとなり、終にアメリカの文人デヴッド・トローロー、ヘンリー・ジョージ (David Thoreau, Henry George) や、ラスキンや、ニーチェ、トルストイ、ゴルキーやに依つて起された一般の道徳上に於ける不安、即ち高き文化の状態にあるに拘らず、なほ免れ難き其不安並に其結果等が益々文學の上の題目となるであらう。[文明に對する反抗の聲は遠く一八〇五年に於てイギリスの文人チャールズ・ホール (Charles Hall) に依つて擧げられて居る]。

## 結 論

- 一——各種の文學史の考量より起る第一の觀念——或種の著作及び其著者の不確實——文藝の破船——廣漠たる著作界を評論して得られたる最も明白なる結果。
- 二——偉大なる智力的運動の共通性——文學上に於ける特殊の時代の間存立する類似。
- 三——感興の共通的本源並に各時代の人心が期せずして得たる普遍的第一の觀念。
- 四——各國いづれも絶對的特長を有せずして各全體の上に寄與する處あり。
- 五——六——古代及び近代の各文明の間に争はれたる優勝權、多くは永續すべき絶對の特權を有せず——或る時代に於て盛んなりし文學の消長——其各の功績其特長並に缺點——ギリシア思想並に其弱點——フラ

ンス思想——イタリア、スペイン思想——ドイツ思想——アングロサク  
 ソンの力量——ロシアの文學的氣質。  
 七——八——各文學の相互關係、互の交換並に相互の影響。  
 九——十——起原及び性質を異にするもの、互に合一する事——現時に  
 於ける集中力並に範圍の縮少——言論及び文學の將來。

文學的統計——現時まで生存せし著作品

吾人は今や各國各時代を通じて思想界の大旅行を終へて將に其終局に達せん  
 として居るものであるが、この際に當り吾人過去を顧みて多少の感慨なきを得  
 るのである。  
 殆ど無限の書物が過去に於て公にせられ、而もそれが只一時に榮えて、雖て忘れ  
 られ失はれたのを思ふ毎に、吾人は文學的名譽の如何にも幻の如きものである  
 事を感じざるを得ぬ。過去幾百年若くは幾千年の内全く忘却された著者並に著  
 作は幾何であらうか。若しこれが歴史を編む事であつたならば、それこそ非常な

勞力を要する事であらう。

思へば書物の運命も千差萬別である。或ものは其初めこそ暗澹として難局に處  
 じたが時代を経るまゝに自ら其地歩を得將來に對しても堅固な位置を占めた。  
 古にはダンテ、ミルトン、カモーン、セルヴァンテスの如きはそれで、彼等の時代  
 は彼等を輕侮したが、彼等は却つて其時代の光榮となつて居る。併し又或者は一  
 躍忽ち其名聲を博したが、それが又忽ち消失してしまつて其跡を止めず、只僅に  
 篤志の學者があつて過去を調べ、それ等忘れられた著者を再び世に出さうと力  
 めるものゝあるので覺えられて居るに過ぎぬ。文學史上には斯くの如き運命に  
 あつて失はれ忘れられた書物が澤山にある。ソロモンの如きも幾千の比喩談と  
 幾百の謠歌とを書いたのみならず、彼は各種の植物並に動物に就いて書物をさ  
 へ書いたと云ふ事である。彼自らも書物を作るには際限がないと云つて居る。而  
 も其書物は、大抵失はれて居る。文學の破片の古代の地に散在して居る數は幾何  
 であらうか。ドレミの圖書館は七十萬卷の書物を收めて居たが、これ等はシー  
 ザーがアレキサンドリアを占領した時失はれてしまつた。ベルガモスの圖書館

は二十萬卷を持つて居たが、これがアントニーに依つてクレオパトラに送られ、其後セオドシアスの時に失はれてしまつた。ホーマーに次いで第一の詩人として數へられて居た有名なパニヤシス(Panyasis)の名を記憶して居るものが幾人あるであらうか。抑またセオクリタスが天下一品と稱へたコスのパイレタス(Phileas of Cos)若くはヴァーシルに依つて賞讃されたユーフロオン(Euphorion)を記憶して居る人が幾何あるであらうか。アンドロニカスの時よりホーレースの時に至るまでローマ人はパキウス(Pacuvius)の學識、アキウス(Acinius)の威力、アフラニウス(Africanus)の滑稽的才能、セシリウス(Cecilius)の元氣等を稱揚して止まなかつた。彼等はこれ等の人以上に詩人はないと考へて居た位であつた。併し今其名を口にすることが幾何あるであらうか。又ヴァロ(Varro)は殆どその筆を染めない題目はない位であつたが、その残つて居る作物は僅少である。

斯く一々忘れられた文人の名を數へて居ては際限もない事である。それ故に吾人は飛んで第十五世紀の事を云ふが、此時にはエラスマスが人心の上に非常な勢力を揮つて居た時代である。當代の人々は彼に世界的名譽を與へた。併しその

著作の半分は全く失はれて再び回復の出来ない様になつて居る。其辯難の文に對する興味は失はれ、教育上の論は時代後れと見做され、今や顧る者もない。更にその文學的價值に至つても僅にこれをその古い死語の内に探らなければならぬ位になつた次第である。また當時からは聖者と云ふ名まで冠せられたシャロン(Charron)やボディン(Bodin)等も不思議にもその高い位置から墮されてしまつた。なほ又ホーレースに比較されたマデレント(Madeleny)サラスト、ヴァーシルに比較されたジョージン・ブカナン(George Buchanan)やハイ十四世の時代に榮えたシュヴァリエ・ド・メーネー(Chevalier de Méne)やボアローベル(Boisrobert)は當時非常な名聲を博して居たが、今日これ等を口にすることも幾何あるであらうか。更に近代に進んで見るにプレヴェー(Prevost)の書いたものは其量に於てヴォルテアのよりは多くある。併し其讀まれる程度は只一篇のルサージ(Lesage)にも劣つて居る。併し當時のプレヴェーは人氣のあつたもので、出版業者は小説家に依頼するにプレヴェーのやうな文體に書いて貰ひたいと云つた位であつた。それ程の小説も吾人には新しくもなく心を惹く事もない。只戀愛談で名のあるマノン・レスコー(Manon Lescaut)に於

て見る小話の極めて良く出来て居ると云ふ外何も吾人の注意を引くものはないのである。アレキサンドル・デュマは六百巻の大冊を書いて居る。而もその書中に散見する才氣と想像とその新鮮の氣との多きに拘はらず、忘却の塵が今やその大冊の上に積つて居る。況んや若し術策その他の方法に依つて當代にその名を得て、而も後に忘れられた其人々の名を擧げたならば、如何に大きな名簿が出来ることであらう。

現代に於て著者や著書並に各家の學說等を分類するのは頗る困難である。それはそれほど澤山に著者や著作が増加して居るからである。批評なるものも切れ切れに日刊の新聞若くは月刊の雑誌等に顯はれるので、恰も只或種類の目録を擧げたに過ぎぬ様になり、その威嚴を失つてしまひ、公衆はまた餘りに澤山の書物のあるので寧ろ撰擇をしないやうになつた。然るに一方には雑誌の發達が書物に對し非常な打撃を與へる事になつた。則ち雑誌は小説若くは詩集を壓倒する程に至つた。これはイギリス、フランス、ドイツ、北米合衆國皆同じである(一九〇

二年に於けるイギリスの新聞紙の數は二千四百五十七で、雑誌の數は二千四百八十六であつたが、その内五百〇三種は宗教雑誌である。然るに一八四六年の計算に依れば雑誌の數は只二百であつた。印刷機は何處にも準備せられ、廉價版は盛んに行はれ、又その印刷機が新聞を普及せしめ、その新聞が一種の文學を流布するその勢は實に凄じいものである。

併しながら新聞雑誌の増加にも拘はらず、書物は増加するのみである。書物の増加は即ち各種の著者が各、その筆を揮つて居る爲めで、詩人、小説家、評論家、哲學者等がそれ、その研究した所を公にする爲めである。統計に依れば日本、一國のみで年々二萬五千卷の書物が公にせられるさうであるが、ドイツもまたこれに劣らぬ位である。ドイツに次いでイギリス、フランスがあり、オランダ、デンマルク、ノルウェー、スウェーデンなどは第三に位し、ポルトランド、スウェーデンは第四、イタリアは第五に位し、最後にロシアが位して居る。計算に依れば七萬五千卷の書物が全世界を通じて年々出版される。さうして既に出版されて居る書物の全世界に流布されて居るその數は三十億に達する。また出版される各書物が各一千部つゞ

印行されるにしても總計七千五百萬卷と云ふ恐ろしい數になる。また著者に就て云へば實に恐るべき多作な人がある。ディディマス (Didymus) の六千の論文、アレキサンダー・ハーデーの六百の悲劇的喜劇、ロベ・デ・ツェガの千八百の韻律ある戯曲書籍製造の器械を持つて居るとまで云はれたヘレスフォレスト等を初めとして、コッツェフェ、タラビウスキー、グライヒ、レスチ、フ・デ・ラ・プレト、マダム・ド・ジャンリ (Kotzebne, Krazewski, Gleich, Resif de la Bretonne, Madame de Genlis) 等の多作な事は實に世に隠れない事である。又十九世紀の劣等な小説家なるフードラ侯 (Marquis de Foudras) は一年に三十卷の小説を書いたと云ふ事である。これに反して古典時代にあつては多くの文人は其寡作を誇りとした。例へば第十七世紀は幸な時代であつた。此時代には文才あるものはゆる／＼と其才を發揮し得たので、その文辭を精鍊しその作を推敲する事を得たのである。また例へばラ・ブリユールを見るに彼はその青年の日を研究に費し、中年時代にはたゞ一卷の書物に心血をそそぎ得た。そしてその一卷に依りて彼はその名聲を博し得たのである。又古典の本源たるギリシア、ラテンの文人等が末代に残し得たものは只の一面であつた併しながら

其一面は尙今日に至るまで残つて居る。

今日に至つては文人の仕事も立派な商買で、これに依つて文人はその生活を營んで居るのである。それ故に従つて出版の便宜と云ふことも必要になつて來るのである。バルザック、ヂューマ、ユルジーン、シエーの時代以來フランス小説のみを以ても随分な量を成すであらう。今日の文人中で最も多作なのはハンガリアのヨイカイとポヘミアのウルグリキ、それに次ではベルジュームのカミーユ、ルモニエである。近代の文人に至つては平均一年二卷の割である。恐らく彼等はその一卷を書き終りてそのインキの未だ乾かざるに既に第二に筆をつけて居ると云ふ有様で、その間に殆ど思想を養ふ暇のない位である。彼等の筆を執るのは恰も官廳の役人が器械的に事務を執つて居ると少しも異らないのである。この外政治問題若くは社會問題の爲め、幾多の人々が時好に投ずる爲め若くはその他研究の爲めに發刊する書物は亦無數である。吾人は實にそれ等が結局如何になり行くであらうか。怪む位である。斯くの如き事情であるからして歴史は一々それ等の細かい著作に就て考へて居る事は出來ない。只其要點をつまみ

最も著名なるまた必要な名をのみ取つて、それを論ずるより外執るべき道はないのである。従つて吾人の研究も極めて概括的に簡略であつた次第である。更に精しく云ふと吾人の文學史に於ける仕事は智力上の潮流を辿り、其影響の表徴を見又或種の努力の跡を逐ひ、互に前後を比較し、以て歴史の根底をつくるのである。又一方には著者の名聲は一時的のものであり、又いろ／＼の思想が一興一衰の有様にあつたとしても、夫が全體に通じて何物か一貫した事跡を残すやうな場合には、全然之を一時的のとして閑却し去る事は出来ないものである。文人一人の事は小いかも知れぬ。併しそれが各方面から鳴り響く時は集つて一つの大音響となり得るのである。さう考へて見れば小文人と雖、知らず／＼の内に時代の特質を形成する其要素となり、更に將來の大勢を定むるものとなるのである。

## 二

普通の事業——凡ての文學的時期に見らるべき類似の形跡

凡そ文學上の時期なるものは必ずその特徴を持つて居るものである。一定の時に於て思想の特色が發揮し、それより哲學文學藝術科學が顯はれ出づるもので

あるとテーヌが云つて居るが、更にテーヌは續けて、この藝術がその抱藏して居る寶を出し盡し、哲學がその學理を吐きつくし、また科學がその一定の發見をなした時は、凡てその藝術も哲學も科學も消え失せて、茲に又新しい精神が起り前時代の精神と交代するのであると云つて居る。

吾人はまた或種の潮流が色々の形をなして顯はれて來るのを認める。例へばフランスに於ける十七世紀は古典的詩を全然模倣したものと云へる。然るに十八世紀に至つては凡ての文學が新しい哲學の色を帯びて來た。詩人も脚本家も歴史家も言語學者若くは修辭學者さへも當時一流の調子を探り、凡てそれ等各種の學者の著作がみな同じ模形から來たかと云ふ趣を具して居た。凡そ如何なる時代も一つ流行の詩なり小説なりが出れば、それが公衆の思想に一種の固い印象を残し、その後に出て來る作はみなその色彩を帯びるやうになるものである。それ故に各時代は皆その代表作を持つて居る。例へば十六世紀にはグアリニの

アーカディア、モントメーヨルのディアナ、ドルフのアーニー(Guarini's Arcadia, Montmayor's Diana, D'urfe's Astrée)十七世紀はスカデリー嬢のシハリー(Mlle. de Scudéry's Clélie)の如

き、十八世紀にはルソンのヌヴェーヌ・ヘロイズ (Nouvelle Héloïse) 若くはリチャードソンのクラリス・ハロー (Richardson's Clarissa Harlowe) の如き、また有名な一時期を劃したるゲーテのウエルテルの如き、また最後に十九世紀に至つてはフローベルのボヴァリー夫人 (Madame Bovary) の如き、又恐らく二十世紀に於けるシンクウイツのクワデイスの如きみな此種の作で當時を代表し且つそれに類似の作を生んだものである。

また吾人は何れの時期を顧みるもその各時代には一種一定の思想が有つた事を認める。例へばアレキサンドリア時代若くはキリスト教時代を見ても、また印度、ギリシア、ドイツの古代歴史に見る神話時代を見ても、或は文藝復興期や古典時代或はローマンチック時代並にそれに次いで起つた偉大なる智力活動の時代を見ても、其時代にはそれ／＼の當時に一定した思想が瀰漫して居た事を認め得る。さうして其思想がいろ／＼に顯はれて當代の人物とその著作となつて出て來た事を認めるのである。

先づ一例として中世紀を取つて見るに、其時代にはシヤンソンド・ジユストやフアン

オーヤ、ナー (Chansons de Geste, Fabliaux, Lais) 何れも傳說的物語であるが殆ど時を同うしてフランス、イタリア、スペイン、ドイツ、イギリス等に起つた。この事實は即ち歐洲諸國民の内に深く其根を置いて居る一致と云ふものがある證據である。

偕てまた文藝復興期に至つてはイタリアに藝術的詩的の隆起があつて、それがスペインに及び、更に形をかへてイギリス、フランスにまで移され、それに依つて思想の獨立が定められ、學問の種が播布された。近世になつてはマラルブ、ドライデンに於て十七世紀の雄辯的精神を見、それに次では十八世紀の哲學的精神が起つて居る。而してその精神はその果實を結び、歐洲を改め、たゞ／＼フランスの革命を起す機會をつくり、應て衰滅するに至る運命を持つて居た。それと同じ様にドイツの哲學的精神は十八世紀の終りに顯はれ、新しい調子を紹介し、新哲學新哲學新文學を作り、近代思想に新しい生命を與へ、科學の世界に力ある影響をなした。その間に十八世紀が來て古典主義はローマンチズムと代り、ローマンチズムはまたバルナシアンと代り、そのバルナシアンの藝術の爲めの藝術は轉じて寫實主義象徴主義と代り、古代の崇拜は一轉して最近學派を尊崇するや

うになつた。要するにこれはギリシアからドイツに代り、ドイツからスカンディナヴィアに代つた次第である。

借て人間の性質が二重であるやうに、即ち心意と物質精神と肉體とのあるやうに、文學にも歴史にも哲學にも二つの側面がある。則ち物質的事實を語る歴史文學及び哲學と、智力上のかくれたることを説く歴史文學哲學とである。即ちまた凡ての文學的時期は二つの方面を持つて居ると云ひ得る。即ち一つは智的の方面で、一つは感覺の方面である。この二つの方面は各時代を通じて或は甲が勝ち或は乙が榮えながら、常に平均を保つて進んで來て居る。その各時代に於ける精神方面が勝るか物質的方面が盛になるかと云ふのは、その時代の代表的作物の如何に依るのでなくして、寧ろ社會の趣味及び輿論の如何に依るのである。此處に附記して言ふが思想の發展も亦歴史の發展と同じ道を行くものである。人間思想の進歩は絶えず新しい觀念が古い觀念に代つて顯はれて來るのである。から、將來の思想が如何になり行くかを明かにせんと欲するならば現代の事を明かに知るを要するのである。

## 三

## 各國民各時代に共通なる向上の念

凡そすべての詩すべての小説等に一貫して存在する觀念及び情緒も亦天下普遍のものである。例へば現實と理想との對立の如きは極めて普通なる詩材である。また苛酷なる運命と戦ふ反抗の思想、變化を希ふ心更に好境遇を求めんとする不安の状態、若くは運命の不公平なると社會の不完全なるとに對し戦はんとするの念慮、是等は何れの時代また何れの國民の詩文にも見る處である。斯くの如き感興の基たるべきものを以て一地方一時代の專有とするは、大氣を以て一國の所有物にするに一般不合理の事である。従つてそれ等の感興に依つて顯はれた詩人、文人も亦實は一局部一時代の人ではない。天下の詩人である。天下の文人である。エスキラス、シェークスピア、ゲーテ、セルヴァンテス等は既に世界の人、萬人の同國人として考へられて居る。彼等偉人が時間と空間とに投げるその光明はやがて思想界に區劃を立てるその差別を消散せしむるのである。

天才なるものが情緒と云ふ一つの繫縛に依つて全人類を一つに結合するその



世界的性質は今日程よく了解された事は未だ曾てないのである。何となれば今日では文化が諸國民を互に近接せしめ互に相影響せしめるので、偏狹なる思想は時代の精神と全く相容れないからである。この世界的廣い見解はすべての人の心に印刻されてある。そして偉大なる一部の人々にのみ適用されるのみならず、詩人藝術家と云ふ多數の者にも適用されるのである。又古代と近代との思想は著しく相違して居ると考へられて居るのであるが、これも前の感興の共通と云ふ事から考へれば甚しく相違した處はない筈である。古人と雖近人と等しく同じ感興と人情とを有して居たとすれば、其間に甚だしい相違はあり得べからざるものである。

只その思想發表の形式に至つては絶えず無限に變じなければならぬ。これはその折々の思想上の形才能の種類に應すべき爲めである。それは恰も凡て各地帯にそれ／＼特別な植物があるやうに、また特別の文化が出来るやうに文學上の作物にも其形の變化はあり得ると考へなければならぬのである。

## 四

各國は世界の大潮流の上に應分の寄贈をなし、其間に絶對の

優長なるものなし

自愛心なるものは個人の根本的動機となるものであるが、個人の集合を論ずる場合に於ても見逃すべからざる要素である。その力たるや一個人にも一族にも抑亦一都府にも一郡にも感ぜられるもので、雖てはそれが廣がつて一國民全體に及ぼし、茲に一國に一貫する虚榮心なるものが生ずるのである。

凡そ何れの國民でも此虚榮心のない國はない。即ち自國を以て隣國にない特長を有するものとして誇る心がそれである。世界の何處に行つてもその故郷を誇らぬ處はない。その誇りが又個人の上に反映して、個人もそれを誇りとする據になり、實際何れの國民も愛國的自負に於て又その優長なる事を説くに、他の國民に一步を輸する事を欲するものはあるまい。中世紀並に文藝興期の間イギリス人は今日の如く頑強に其強固にして不屈なる國粹を誇りとして居た。無論當時の英人は自分等を以て人類の王と考へて居り、イギリス島裡以外に住んで居た民に對しては非常な憐憫の感を有して居た位であつた。更にスコットランドに行

つて見るとこの國では其王家の門閥と其世界に於て最も辯證の術に長けて居る事を誇りとして居た。フランス人はその風俗の優美な事、その文藝上に卓越した處のあるを得意として居り、ドイツは學術の深奥を究めた事を自慢して居る。ヴェニスには只高貴であると云ふ考を以て自ら慰めて居るかと思へば、ダンテの言葉に依ると、シエナの民よりも虚榮心強き市民はないと云ふ事である。ローマ人はその祖先を誇り、ギリシア人は國家の衰運に際しても過去に於ける偉人の光榮を回顧して之を誇りとし、自ら永久に文學の母たる事を以て任じて居る。イタリアに至つてはシセロの時以來自ら雄辯の國であると考へ、今日なほ他の歐洲諸國を以て野蠻國と考へて居る。猶太人は預言者ダニエルの時に於けると同じ様に今日なほメシアの來る事を固く信じて居る。トルコ人はまた自分等が眞實の信仰者であると考へ、キリスト教徒を輕蔑して居る。極東に於ても支那人は他の人類から超然として獨立して居る。傳ふる處に依ると支那人は其自ら地圖を作り自分の帝國を大國として其中心に書き、その周圍に他の群小列國の散在する様を只筋をつけて示して居る。其狀は恰も今日歐洲の地圖がアフリカ内地の

人跡至らぬ處にたゞ標號を記入して置くと同じである。人間の智識は進んでその見解は廣くなり、國家相互の關係は全然變化して來たに拘はらず、斯くの如き自負の感に至つてはなほ依然として存在して居る。先づ一例を擧ぐれば今日のフランス人はなほ依然として機智なるものはゴール人即ち自らの特有であると信じ、またギリシアは世界第一の都凡ての光明と進歩の本源であると考へて居る。イタリア人も亦その國民の精神と云ふやうな事を誇りとして、何事を云ふ場合にも自國民の才識を口外しなければすまないと云ふ趣がある。近代のドイツに至つては勿論その軍事上の成功に驅られて絶えず自國の偉大な事を讃じて居る。併しながら自分の特に研究して居る事、特殊の藝術若くは特別な一國を愛好し他を排すると云ふのは極めて狹量な事で、殊に自分の生れた國を以て世界の中心とするが如きは眞に偏狹な事と云はなければならぬ。實際或國民のその道徳的の卓越と云ふものは決して祖先から相繼承する遺傳的のものではない。凡そ何れの文化でも多少永續したその光彩ある時機を持つて居たので、或る國民の

みが特に優越して居るわけではない。例へばペリクレス時代のアテンス、オーガスタス時代のローマは無比の時代であつた。又アバシデスの下にあつたバグダットは科學の首都であつた。抑亦文藝復興期に際してはイタリアが智力上の主權を握つて居た。當時のイタリアは文學に科學に藝術に向ふ處として勝利を博せざるはなく、更に財政外交並に殖産の方面にまで進んでその主權を示して居り、イギリスよりモスコイに至るまで、フランダースよりエチオプトに至るまで、各國は皆その智力の膝下に威服せられて居た。斯くの如きはローマ帝國の日以来イタリアの嘗て見た事のなかつた盛況であつた。之に對してはイギリスにエリサベス時代があつた。これはその富の増大に於て、製産の豊富なる事に於て、才氣の煥發に於て、殆ど比較すべき時代のない位で、ギリシアのペリクレスの時代、ローマのオーガスタスの時代のみならず、レオ第十世の時代若しくはルイ第十四世の時代に比して決して遜色はなかつたのである。また十八世紀の終りから一八二〇年頃までに至るドイツはゲーテ、シルレル、ヘルデル、フヒテを有して居つた時代で、これ又歐洲の智力の中心であつた。フランスに至つては屢歐洲に於ける智

力の上の主權を握つた事がある。即ち第十二世紀を以て始まり第十三世紀第十七世紀第十八世紀等は何れも歐洲に於けるフランスの全盛時期であつた。されば吾人は人間思想の最も高尚なる最も完美したる姿を何處に求むべきであらうか。ギリシア人は活動の人民であつた。天性大膽な詩的の想像を賦與され、平和に處しても戰時に處しても常に其道を得、また哲學にも藝術にも秀で居り、十世紀の間世界の文化を指導して居たが、吾人はギリシア人を以て最も高尚なる最も完美したるものと認むべきか。若しくは凡てのものを道理の支配の下に置いた文化の燦爛たるフランスに之を求むべきか。或は又イギリスがその文學を五世紀も連続して維持し、無数の思想家、歴史家、哲學家、戯曲家、小説家を出したそのイギリスを撰ぶべきであるか。スペインはセルヴァンテスとカルデロンを出して居り、ドイツはその非常なる天才を發揮した。吾人はこの二國を撰むべきであるか。併し斯く擧げ來れば各、その長所があつてそれが各、競争の有様にあるやうであるが、その競争の状態が即ち直ちに完全なものゝない事を證明するのである。

古代と近代との優劣を論ずるのは無益な事である。また歐洲の列國は上記の通り、にそれ／＼の特長を有して居るのであるが、併し若し或る國民がその國境以外に勢力を出したと云ふ事を以て卓越した事であるとすれば、少くとも過去の事に就て云へば、フランス國民が最もその勢力を國外に揮つたものであると云ひ得る。その勢力を及ぼした外征の度數に於て、その範圍に於て、又その永續の時間に於て、此國民が他に勝つて居ると考へられる。併しながら斯かる事を證明するには多大な事實の證明を要するので、之を明かにするのは容易な事ではないのである。

この國民的自負と同じ事が言語の上にも履行はれて居る。之をフランス人に尋ねて見ると、彼等は熱心にフランス語の長を説き、モンテニス、パスカル、モリエル、ヴォルテア等がその美妙なるまた深遠なる思想を表白したその國語の優越なる事を確信し、これこそ機智と滑稽と常識とその好氣質とを語るに最も適したるものである事を説くであらう。更にドイツ人を捕へて尋ねて見れば、彼等も亦其思想感情を表白するにはドイツが最も完全にして變化に富める事を説くであら

う。また去つてロシア人に之を尋ねるならば、彼等も亦ロシア語を以て第一の國語としその豊富にして且つ明快な事を説くに相違ない。ロシア語に就てはミカエル・ロモノソフが十八世紀に於てその同胞たるロシア人に語つた事が頗る興味ある事である。ロモノソフは勿論トルストイ若くはツルゲーネフを知つて居る筈はないのである。而もなほ次のやうな事を云つて居た。曰く、ドイツ皇帝シャルス第五世はスペイン語を用ひて神様を禮拜し、フランス語を以て友人と語り、敵と語るにはドイツ語を用ひ、婦人と語るにはイタリア語を用ひたと云ふ事である。併しシャルス皇帝にして若しロシア語を知つて居られたならば必ず之を用ひて凡ての人に語られた事と信ずる。何となればロシア語の内にはスペイン語の高貴な處もあり、フランス語の活き／＼した處もあり、ドイツ語の力もあり、イタリア語の優美な處もあり、更に進んでギリシア語の豊富にして美しく且つ明確な處をさへ備へて居るからである。

併し斯くの如き言語上の自負と雖、又かの國民の性質に關する自負と同様頗る偏狭のものたる事は免れない。凡そ人間の思想は南方の人若くは北方の人の所

有と限つたものではない。如何なる言語でも其内に立派な思想が含まれて居ないとは限らない。イギリスの言語は頗る簡明で、その文法も簡略である。ドイツ語はその文字が無限に澤山ある。そして何時でも新しく文字を製造する事が出来る。又文辭の位置を變更し取り換へたりする事が容易に出来る。イタリア語に至つては音樂のやうな美しい響を持つて居り、スペイン語は調子の柔かな諧音を備えて居る。ドイツ語は野蠻である。粗暴な言語であると云はれて居る。併しドイツ人に云はせるとその粗暴な野蠻など云ふ事は甚だ誇大にされて云ひ傳へられて居ると云ふ事で、また適當に之を發音しさへすれば、極めて温和に聞えると云ふ事である。如何にもドイツ語が詩に適しまた音樂に用ひられる立派な言葉である。と云ふ點から考へれば左様であるかも知れぬ。

フランス語はスラヴ語若くはチュートン語の如く豊富な其源を持つて居ない。併しながらなほ且つ凡ての音を出す事は出来る。之を長く延長してもまた短く縮少してもその透明にしてその變化の自在なる點は失はれない。交際若くは雄辯の機關としては、その變化の自在なる事更に驚くべきものがある。要するにフ

ンス語には他に見るべからざる長所のある事は疑を容れないのである。ドイツ語は冗長で且つ語數も多く、丁度フランス語の優美にして簡潔なると反對である。そして一つの思想をのべるに、くゞくゞとて而も明瞭を缺く。併しながら抽象的の事を述べるには頗る適して居り、全く理想的な考に適當な衣服をまとはし、意義に於ける極めて僅かの陰影や微妙なる點を説かじめる事が出来るのである。哲學の問題を論議する上には最も適當な言語と認められて居る。ドイツ人は又その國語の長所と短所との爲めに世界第一の翻譯者とされて居る。何となればその言語が容易に個々に分解され、又容易に幾多の文學が集合せしめられ得るので、場合に應じて原語の音義に之を適從せしめ得るからである。アノトリーのドイツ語に關する説は次の如くである。曰く、ドイツ語は容易にその個々の言葉をつぎ合はし得べく、又その成句が簡潔でなく、緩和なので近代思想を顯はすには却つて伸縮自在な都合のよい發表機關と見做されて居ると。抑、ホーマーやシェイクスピアの初めて翻譯されたのはドイツ語である。また東洋の詩のドイツ譯が傑作であると云ふ事は世間に知られた處であるが、ドイツの文人はその第一流

の人々即ちゲーテ、シルレル、ヘルデル、チーク並に兩シレットケルの如き大家すら翻譯を餘業とする事を厭はなかつたのを見て、その國語の如何に外國文學の翻譯に適じて居るか考察しられる。

五

外國國民の智力的特色並に國民的氣質

フランス國民は文辭の美を了解する特色を持つて居る。ゴール人即ち今のフランス人は戦争と言語とに興味を持つて居ると云ふ事は、疾くにジュリアス・シーザが云つた處である。如何にもフランスは國民として修辭並に散文に於ては第一流の位置を占めて居る。文學上の雄辯若し左う云ふ言葉を用ひ得るとすれば、と云ふ事が其文學の特色である。フランスが理性とか理論とか、又其明快な考へとかに依つたものか若くは普通の用語にさへ美しい言葉を用ひ、其内容の如何に拘はらず辭令を重んずると云ふ習慣に依つたものであるか、何れにしても散文に於て其最高なる光輝ある位置に達したと云ふ事は、凡ての批評家の一致する處であつた。イギリスもドイツもイタリアも又スペインもフランスのよりは

秀れた詩人を有つて居る事を誇るであらう。併しながらフランス程第一流の散文家を澤山に擧げる事は出来ない。シェイクスピアを出したイギリスは散文の大家としてフランシス・ベーコン、アデリン、スウラト、マコーレー、エドモンド・バーク、ニーマン(ニーマンは宗教文學の大家として、イギリスのフェネロンと云はれて居る)を擧げ得る。又ダンテを出したイタリアはマキアヴェリを擧げ、スペインはセルヴァンテスを擧げ、ドイツはレッシング、シルレル、ゲーテ並に哲學者にして且つ美文を草じたハイヒテ、ヤコビを擧げる事が出来る。然るにフランスはヴイクトル・ユグの云つた通り二十人位の散文の大家を擧げる事は容易である。フロイッサール(Froissart) ラベレー(Rabelais) モンテーヌ、デカール、バスカル、モリエール、ラロシフコ、カーチナル・ド・レット、ラブリユエル、マンブランシ、ボシユ、フェネロン、ブールダル、マダム・ド・セヴィニエ、サン・シモン、モンテスキュー、ヴォルテア、ジャン・ジャック・ルソー、バップオン、シャトブリアン等は、その主要なものである。がなほ一局部に於て第一流であつた大家を擧げれば、コムミン、アミヨ、カルヴァン、フランソア・ド・サル、グズド、バルザック、アルノー、ニコール、フレシエ、マシヨン、フリユイリー、マダム・ド・マンテン、サン・エヴ

レモン、ファンテネ、ヴァナル、グデ、ドロー、ルサー、ジラメネー、オーギュスタン・チエリ、  
 シュー、サン、ド、ブ、ロ、ス、バ、ー、メ、リ、メ、ン、(Commines, Amyot, Calvin, Francis de Sales,  
 Guez de Balzac, Arnauld, Nicole, Fléchier, Massillon, Fleury, Mme de Maintenon, Saint Evré-  
 mond, Fontenelle, Vauvenargues, Diderot, Lesage, Lamoignon, Augustin Thierry, George Sand,  
 Prosper Mérimée, Renan)等を挙げ得る。併しまだ吾人は近代に於ける最も重要な  
 文人を残して居る。即ちオノレ・ド・バルザックとその一派の特別な文字並に近代文  
 學の鑑賞家であり、精密に又學識に富む文體を主張したフロール・ベル並に兩ゴ  
 ンクールを以上の人々に加へなければならぬのである。但し此最後の三人の如き  
 はその精神に於てドストイエフスキ、トルストイ一派のロシア小説家に近似  
 して居て、大家とは云はれ得るが模範とするには不適當なのである。併し兎に角  
 フランスの散文は縦令その完全なる調和を缺く事がありとすると其量に於て  
 抑亦その種類に於てデモスセネスを出し、ヘロトダスを出した古代ギリシアの  
 黄金時代を外にしては之に比すべきものゝない程である。  
 フランス語及びフランス文學の最も著しい特色はその擴大し、その影響を大に

し得る能力である。外來のものをフランス化させる精神は決してフランス文學  
 に缺けて居るものではない。フランス文學は實にその精神に依つて擴がり又そ  
 の勢力を大にして行つたのである。パリに始まつた思想若くは觀念にして世界  
 に行き渡つたものは決して少くはない。フランス國民は社交的、交通的才能を非  
 常に豊かに所有して居ると云ふ事を誇りとして居る。只フランスはその歴史的  
 藝術的過去に依頼する事多きに過ぎ、その威力を擅まゝになし得た時に當つて  
 歐洲を左右して居た事を自負し、その過去の事を以て直ちに現代を推し、現代に  
 於てもなほ最も有力なものであるとの考を抱く事が往々ある。併しそれにも拘  
 はらず實際フランスが歐洲に於て優越した人民の一つであること云ふ事は争ふ  
 べからざる事であらう。  
 フランス思想は北方文學に見られる創意的の能力並に繪畫的美觀を缺いて居  
 る。又フランス思想は屢ドイツの誇大的傾向並にイギリスの變矯的性質と競争  
 をして幻想を逞しくする事を勉めた事がありはするが、併し空想的の考は決し  
 てフランスの特色ではない。

趣味は既に述べた如く全くフランスの特有である。併し趣味と云ふ事は創作的の能力ではない。また感興の源泉も他の國民にあつた程にはフランスに認められない。フランスはその思想の發表を直ちに有形の世界に求めるので、理想的の藝術に於ては全然第二流に位せざるを得ないのである。それ故繪畫に於ては近代派の中に殆ど競争を入れない位に高く進んで居るにも拘はらず、なほ文藝復興期の大家には遙に及ばないところがある。なほ音樂に於てはドイツ、イタリアに劣り、哲學的理想に於てはドイツに劣つて居る。そして若し十九世紀にグイクトル・ユーゴーがなかつたならば抒情詩に於てもイギリスの後塵を拜さなければならなかつたのである。

要するにフランスは藝術に於てイタリアに凌駕されたと云ひ得べくんば、同じ意味に於て政治的の制度に關してはイギリスに劣り、歴史的智識並に批評に於てはドイツに劣つて居ると云ひ得るのである。なほ此外の點に於て他の諸國もフランスに勝つた所を持つて居る事であらう。フランスの強固な力と價值とは外國に對して有じて居るその位置である。フランスの外國に對する勢力はその過

去の歴史に歴々として明かに見られるのである。なほ添へて云へばその發達の跡に於て吾人はその偉大なる事を認めると共にフランスが文學の上に最も精力を注いだ模範、即ち技巧と雄辯とを以て飾られた理性の言語を提供したと云ふ事を認めなければならぬ。縱令他の國々の文學は色々の功績や長所を持つて居るとしても、十七世紀に於けるフランスの文人に依て示された心意的能力の靜穩なる平衡と云ふものに至ては到底他に求むべからざるものであらう。

抑、フランスとドイツとは互に相反抗して政治上敵國の姿をなして居るが、實は兩者互に長短相ひ補足して居るのである。これは果して兩國の好む處であるか否かは別として、兩者實は相俟つて文化を完成して居る趣がある。

ドイツは喜んで直ちに外國の觀念若くは勢力を容れる國で、社會上若くは智力上に於て隣國即ちフランスに起た大事件には必ず注意して居る。如何にもドイツは強い國際的感<sup>フランド</sup>じを持て居る國である。云ふ迄もなくドイツは祖國と云ふ觀念の強い國である。併し彼等は又容易に他國の觀念を受容れる。それは他國に於



て有益であり善良であつた者を取て自國を富有ならしめんと欲する希望が強い故である。ドイツ人は好んで外國を研究し、以て自分の樂とし又自分の利益とする。而して何事をも翻譯し何事をも模擬するのがドイツ人の持ち前である。之に反してフランスは容易にその競争者の智力的功績を認める事をしない。特にドイツ語並にドイツ思想に關しては公平を缺いて居る。スタエル夫人(Stäel-Hellenbrand)が出てドイツの急激な猛烈なその發達の華々しき状態を明かにフランス國民に示すまでは、人々はドイツを念頭に置かず、批評家の如きも智識あるものドイツ語を話すのを耻辱とする位に考へて居たのであつた。フランス人は斯くの如くドイツを輕侮して居たのであるが、批評的學問的の著作が多くドイツに見出されるのを見るや彼等は此の思索的人種を以て文學の運搬夫であること云つた。併しドイツが斯くの如く長足の進歩をなし且つ思索の上に優越したのは、恐らく不撓不屈の忍耐並に只眞理を愛すると云ふ外に何物をも求めざる考を以て明確なる觀念を求め、而も是等と共にその深遠なる學識に加ふるに思想を統一する能力の發達して居た爲めであらう。

ウルフ、ニーブール、モムゼン等のやつた歴史的科學的批評はドイツの光榮であつた。そして永い間ドイツの獨占であつた。それ故にアーネスト・レナンの云つた通り科學と哲學並に審美學及び宗教との關係を究める方法なるものは嚴密に云へばフランス思想の特産ではない。なほ進んで云へばフランスに於ては哲學が往々事實と歴史との智識を離れた抽象的研究であつた趣があるのみならず學問も個人の慰みであり、宗教は教會の信條を承認する獨斷の教義であり、一向に個人の良心に關係のないものゝやうに取り扱はれて居る。高尚なる人生の問題、事物の秘密を知らんと欲する宗教的慾望の如きものは、フランスに於けるよりは寧ろドイツに於てよく了解されまた充分に研究されて居るのである。ドイツは歴史的古典の地であるのみならず、また特に哲學的抽象の國である。軍國的情熱がドイツの理想的希望を奪ひ去つた以前に於ては、此國は歐洲に於けるインドの如きもので、漠然として廣大に汎神教の神ゾルテヌスの如く多種多様の姿を持つて居たのである。

十九世紀のドイツの文人中にはドイツの思想にも全く抽象的な特色と同様に

現實と云ふ事が重んぜられて居たと云ふ事を證明しやうと欲して、從來ドイツに適用されて居た哲學的國民と云ふ稱號を排斥しやうとしたものがあつた。これはドイツの特長であつた極端な唯心主義に對する反動と云ふべきものであるが、併しながら斯くの如き説も決して澤山の證據の上に立つて居る。從來の判斷を打ち消すことは出来ない。特にドイツに於て起つた形而上學若くは神學に關する系統の數が、列國に起つたもの凡てを合はしてもまだ及ばない位であるのを見たならば、ドイツが抽象的の國民、哲學的の國民であると云ふ事は決して否むべからざる事である。今一寸哲學者の名を擧げて見るに、ライプニッツ、カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲル、ヤコビ、フリース、ヘルバルト、ゾルケル、マックス、シュタルネル、フオイエル、バウマン、ショーペンハウエル、クリューゲル (Leibnitz, Kant, Fichte, Schelling, Hegel, Jacobi, Fries, Herbart, Solger, Max Stirner, Feuerbach, Schopenhauer, Krieg) 等の他無數の哲學者があつて、それが各一種の系統を立てて居る。またこの内にもライプニッツの哲學の基礎を立てたものはフランスのデカートの系統であると云ふ。それは素より左うに相違ないが、ライプニッツはそのデカートから受けたものを百倍

にもして戻して居る。ライプニッツは近世のアリストトールで、十七世紀の學問の柱石である。彼の手から零れた思想の種子は學問の各方面を豊饒ならしめ、各種の智識を養ひ、その進歩を助けたものであつた。なほカントの著作はその理論に於ても作風に於ても全然抽象的であつたが、これが又三千も四千もそれに就ての註釋を世に出さしめるやうになり、更に下つてシェリング、ヘーゲル、ショーペンハウエル等は、その大呼吸に依つて各思想家の心靈を動かしたものである。實際ドイツは澤山の觀念を生み出したものである。その思索家は最も隱微なる問題の奥深く投入し、更に眩惑せしめるやうな最も高い處まで飛躍して居るのである。是等の人間思想の建築者は如何なる峰をも踏破し、測量し、その頂上が雲にかくれて居ても少しも躊躇逡巡する事はなかつた。之を以て吾人はドイツ國民の根本的特色は沈黙思想と深遠なる考案とであつた事を認めるのである。少くともこれは近頃に至つてのドイツの戰爭的本能が目醒して、國家を覺醒せしめ、實際的物質的方面に注意を向けしめるやうになるまでの状態であつた。

全體として考へればドイツの學者は全歐洲中最も學識あり、また最も思索力のある事は疑ふべからざる處である。慧眼なる哲學的洞察と該博なる智識とはドイツ人の腦裏に於て別つべからざる特質である。彼等は實に人間の心意を研究するに於ては世界の先頭に立つて居ると云つて良いのである。且つポップ、フムボルト、ラッセン、兩グリム(Bopp, Humboldt, Lassen, Brothers Grimm)の如き比較言語學の建立者や、ローマンス語の語源學を始めて開初したフレデリック・デイス(Frederick Diez)を出したこの國は又東洋の研究に關しても無比と稱せられて居る。妙な事であるが近世のドイツの東洋學者を一方に集め、他の一方にドイツ以外の歐洲諸國並にインド帝國及び北米合衆國の學者を集めて、さてその兩方の數を比較して見るに、なほ且つドイツの學者の方が多いと云ふ現象を呈すると云ふ。併し東洋研究なるものは非常に歐洲の學者を奮起したものであるが、事實を云へばフランスと雖その功績に於ては必ずしもドイツに劣るものではない。支那帝國に初めて渡つたものはフランスの宣教師である。またゾロアスターの書物を初めて得て之を世に知らしたのはアンクナル・デュペロン(Anguelil Duperron)の生命が

けの仕事であつた。十九世紀の初めの三十餘年の間に於けるセミチック語の研究はシルヴェストル・ド・サシー及びカトレメール(Silvestre de Sacy, Quatremère)の指導の下にパリに集中して居たが、それと同時にアベル・ド・レニッサー(Abel de Renusat)は韃靼語の探究に依りトルコの比較言語學に關する大事な企圖をなし、更に佛教に關する著書に依り他の世界とは全然趣を異にした廣大な別世界を世間に紹介した。シャムポリオン、ブルヌン(Charpollion, Burnouf)等は只の學者ではない。彼等は天才ある言語學者でまた發見者であつた。斯くの如くして近世に於ける東洋學上の大事な發見は皆フランスから起つて來たと云ひ得るのである。ドイツに於ける東洋研究は非常な發達をなして今やフランスの位置を奮つた趣がある。併しなほフランスは別途の方法即ちセミチックの碑銘學に於て牛耳を取つて居る。なほ學者の説に依れば一八四三年にイチーメン(Yemen)に於てハミチック文化即ちソロモン王を訪問したシェバの女王(Queen of Sheba)なる只一つの傳説を残したかの偉大なる文化の跡を發見したのもフランス人で、化學者なるアルノー(Arnaud)であると云ふ。またヘルシア、インド、エチプト、アッシリア、カムボディアの古い文化を

初めて世に示したのもフランスであつた(カムボディアに於てアッシリア及びエジプトの文化に比すべき古い文化の跡を見付けたのは殆ど世間に名の知れて居ないフランス人であつて、時は一八六〇年であつた。ジョーム・ス・ダーヌステーターの東洋研究(James Darmesteter, *Studies of the East* 参照)又インドのカリダサ、サクンタラの戯曲を出したその本土を初めて発見したものはイギリス人のジョーンスとコールブルック(Jones, Colebrook)とでありとすれば、此戯曲を整頓して世の中に出し、深大な感銘を與へたのはフランス人ブルヌン(Burnouf)の仕事であつた(サクンタラの戯曲を初めて発見したウィリアム・ジョーンスなる有名な東洋學者はまた詩人でもあつた)。斯くの如く発見の名譽は英佛に歸せらるべきもので、ドイツは全く之に與つて居ない。併し其後に至つて東洋に關する問題に力を盡くし、精密なる研究をなし、努力と忍耐とに依つて此方面にも有力なるものとなつたのである。且つドイツの學者は特に言語學に於ての開路者であつた。これは彼等ドイツ人がその方面の研究を好み、また學問をして更に深遠ならしむる爲めにその明晰なる頭腦を以て分類をなし得た爲めである(トマス・ベンフェーの十九世紀

初期以後のドイツに於ける言語學並に東洋語原學の歴史(*The History of Linguistics and Oriental Philology in Germany Since the Beginning of the Nineteenth Century*, by Thomas Benley)参照]

ドイツはまた古文書若くはパピラスに書かれた文字を読み分ける事に關しては實に不撓不屈である。彼等は屢その到達しても一向世間に榮えならぬ結果を得るに過ぎない場合に於ても、徐々としてその至大なる困難を排し、凡てのものを放棄してその方に潛心する。それ故にその事業は世間の前には榮えとならぬ。いでも而も學者には大に助を與へ利益となるものである。例へば或るものゝ年代を定める事とか、文學を読み分ける事とか、アッシリアの表意文學を読む事とか、碑銘の上の問題を解決する等の事がそれである。斯くの如き彼等ドイツ人の功績は没すべからざるもので、彼等に依つて発見された事實は澤山にあるのである。殊に彼等ドイツ人は些細な事の研究に献身して居る事もあり(それは極めて微細な事であるが、その微細な事を知らなければ吾人の智識は常に皮相的で不完全である)又それが爲め往々頗る興味のある概括をなし得るのである。併し彼

等にして或る事柄の上に殆ど期待されて居なかつたやうな光輝を投げ得たならば彼等の努力はそれに依つて贖はれたものといふべきで彼等は満足し得る事であらう。蓋し斯くの如き光輝はいろ／＼な事物を照らし新事實の發見に便宜を興へ、幾多の事實を建立するに有用なる要素となり得べきものであらう。數年前にバイブルの解釋に就て重大な問題が起つた。夫は舊約のイサヤ書の内の一句で、而も只一つの代名詞の用ひ方に就てであつた。些細な問題といふのは斯くの如きものを指すのである。凡そ學問といふものは斯んなもので、個人／＼が極めて些細な事を研究して行きながら、その學者が互にその研究の結果を合せて一つの大きな事實を發見するやうになり、更にそれ等を綜合して一つの大きな學問を形成するのであるから、ドイツ人のやつて居る是等微細の研究は頗る緊要なものである。

併しながら又ドイツ人は、著しく概括的觀念を發見する力を持つて居る國民は他に見る事は出來ない。概括的觀念といふのは或る問題に關する凡ての要素を一つの主要なる觀念に結合してしまふ事並に言語とか思想とか若くは宗教

とかを形成する其初めの原因を明かに認める事をいふのである。又ドイツはその全然哲學的な能力を智識の凡ての方面に適用して、最も抽象的な學問並に最も乾燥無味なる學問を再興した。

最後に言ふべき事はドイツ人が比較文典を創めてつくり、その方面に於ての典據となつて居る事である。一時は比較文典と云へば凡てドイツの専有のやうに考へられた位である。ローマンス語を話す人民も、ゲルト語を話す人民も、凡てその自分の話して居る言語の歴史はドイツ人から學ばなければならなかつた。爾來比較言語學はライン河を渡りフランスの地に入つては來たが、それは凡てドイツの學者ボップ、ディエズ (Bopp, Diez) 等の教を受けた人に依てなされたのである。兎に角ドイツは研究の事に關しては歐洲の實驗室の様な者になつた。これ偏に高等教育並に大學教育の立派な組織に依るので、尙一には世間の公衆が學者に同情を有し、國民の智力的生命に關しては歴史的科学が所謂普科通學なる者と其價値を等うするものであるといふ事をよく了知したのに依るのである。

エマーソンが何處かでイギリス思想の特徴の一つとして心意的唯物主義といふ事を言つて居る。その意味はイギリス人は現實の事實即ち説明の助けなくしては事物を考へ、その道理を説く事が出来ないといふ事を云つたのである。例を擧げて云て見ればウォーズワースはその最も近似して居ると稱されて居るロマンチック派の詩人チャルタンと如何に相違して居るか。イギリス人に於ては縦令如何に抒情的であつても、又如何に自然に對する愛好の念が深いと云つても、常識といふ事は離れる事は到底出来ない。それと共にイギリス思想は概括的觀念並に理論上の氣品高き見解を缺いて居る。歴史家の語る處に依れば凡ての學問特に政治に關する學問に於て、其純理則ち哲學的に互る處はイギリスに於けるよりは寧ろ大陸に於て盛に研究された。併し倫理と道德に關するもの殊に後者はイギリスに於て發達したといふ事である。イギリスの大思想家は到底ブレスト、カントの高きに達する事は出来なかつたが、併しながら人間に關する正確なる智識、義務の觀念並に自由なる意志の指導といふやうな事に就ては立派な學說を見る事が出来る。即ち立派な道德學者はイギリスに求められるのである。

斯んな點からイギリス人は心理道德並に社會學的の教に關して永い間其勢力を保持して居た。なほ形而上學の範圍に於ても、彼等英人の働きは無効ではなかつた。それ等の事に關してはロック、バークレー、ヒューム(Locke, Berkeley, Hume)等のなした處を思ひ合せれば充分に解る事である。

イギリスはまた政治上の雄辯といふ事に關しては第一流に立つて居る。その演説を以て成功した人の數は多くまた永く續いて居る。殆ど二世紀間吾人は絶えず人民の權利と個人の威嚴とを宣揚せんとする幾多の高尙なる聲を聞き通して居た事である。實にイギリス議會の莊嚴は古のアゼンスのピンクス若くはローマのフォーラムとも比すべきものである。イギリスの議會は歴史と法律との寺院であり、常に公開された雄辯と自由とのプラットフォームである。公衆が常に捕捉せんと欲して居た高尙な目的はその議場で討究されたのである。バークやピット(Burke, Pitt)は茲に人類の爲めに辯じ、ウィルバークフォース(Wilberforce)は茲に大膽に奴隸制度の廢止を論じて其功を收めた。かの常に政略の犠牲に供せられて居た不幸なるアイルランドの爲めには茲にオーコンネル、シール、バークネル、グラッドス

トーン(O'Connell Shiel, Parnell, Gladstone)等の熱烈なる聲が聞かれた。茲にまた大資本家の慾望に對して勞働者並に貧民の爲めにピール(Peel)の常識に富める確乎たる音響が聞えた。而もそれが勝利を博した。

概して云へば特に詩的感興の上に就てイギリス人はその思想の力ある事、その表白の元氣に富める事並にその實質に於て又その意匠に於て豊富に且つ變化に富めるといふ事に於てその特色を持つて居るのである。

イタリア思想は物質世界を以て根本的なもの考へる傾向を有して居り、又それを自負して居る。そして天然と氣候とから受ける處の傾向を以て全く國民の本能的官能主義から來るものと考へて居る。イタリアの思想にはまた圓轉滑達伸縮自在といふ趣がある。併しながらフランス人の持つて居るやうな明快な論理的な處並に精密な分類的腦力を持つては居ない。人は往々イタリアがフランスに近接し、文學上絶えず交通あるが爲め、智力上フランスに似て居ると信じて居るやうであるが、事實はこの兩姉妹國は全く相違して殆ど同じ處はない位で

ある。イタリア思想は絶えず動搖して、何等の用意もなく忽ち甲の問題から乙の問題に考を移す力を持居るが、斯くの如きはフランス思想の秩序ある形とは全く異つた處である。恐らくイタリアの方が思想の源泉に豊かであらう。併しフランスの方の進歩は緩慢であるが、其仕事は確實に行はれるといふ傾がある。

イタリアの思想は火山に比較される。その不時の發射がなければ全く力を持つて居ないのである。その一度發射するやその火の柱を天に揚げるその有様は壯觀である。併しそれが終れば只ラバと灰と小石と硫黄とが残るのみである。イタリア思想はまた全き計數上の事若くは哲學的の事にまで熱血と想像とを伴ふ。それ故にイタリア氣質は熱情の顯はれた時に最もよく認められる。冷やかな空の下には弱くなりその特色を失ふのである。此熱烈なる性質の結果としてイタリア人は演釋的推理を好まず、従つて觀念の整頓を缺いて居る。尤も斯くの如く斷案を下してしまふのはやゝ早計に失するかも知れぬ。何となれば前に説いた通り随分イタリア人も觀察と比較とを好み、實際的な有用な事に對しても鋭敏なる知覺を有して居たからである。或る哲學者の言ふにイタリア人は實驗的美

術家である。而もこれがその國民的才能の創意力となるのである。イタリアにはまた學者や哲學者がないのではない。併し切實なる考慮熟考したる思想は此國の文人が最も閑却して居た處である。イタリア文人の最も伶俐なるものは局部の爲めに全體を忘れ、人を喜ばす爲めに必要なる事を閑却し、文辭を修飾する爲めに一卷の意匠を忘れ、また不思議な形に依つてのみ其思想を傳へ、閃光の如き奇警なる方法に依つてのみ其文體を残さんと欲して、決して人の心を動かさし人を納得させやうとはしない。一言にして言へばイタリアの思想は吾人を樂ましめ吾人を引きつけやうとする。それは如何にも華々しいが、その國民の性質と同じく皮相的である。一二の例外は別として深遠なる方面は全くイタリアに缺けて居る。又彼等は深く眞實に人間を知る事をしないのである。

スペインの文學は非常に創意に富んで居る。其詩は光彩燦爛たる心象に充ちて居り、心意の勇壯な趣と軒昂たる有様とを顯はして居る。其詩は人を刺激して活躍せしめ國家と宗教との爲めに犠牲たらしむる所がある。併しながらスペイン

の文學には大缺點がある。スペインの文人は永い間宗教審問の爲めに威嚇され國民思想の排外的傾向の爲めに拘束され、自ら退讓して絶えず古きを繰返へしつてのみ居るやうになつた。十七世紀に於けるフランスの戯曲が時代に相應しない事を行ひ、地方的色彩を缺いて居たといふ非難を受けた事があるが、スペイン文人の缺點は丁度それと同じくして、而かも更に遙かに甚しいのであつた。ロペ・デ・ウエガやカルデロンはシニエラその他ローマンチック一派の爲めに格外に賞揚されたのであるが、シェイクスピアとは決して同列に云ふべき詩人ではない。スペインの戯曲は一種獨特のもので哲學的や人道的の處はない。總じて南歐の民の想像は默想には向かない(ポルトガルの文學も之と同様で、非常に感情的であつて哲學的分解力は全然缺けて居る)。それ故にスペインには歴史編纂者はあるが歴史家はない。又科學の野に於ても其長所は學者の想像を逞うし得る様な方面にあるので、建築學や經濟學の様な動もすれば空想に陥る様なものを得意として居た。従て學問も往々小説の様になる傾があつた。要するにスペインの思想は抒情的で想像に傾き推理といふ方面は貧弱であつたのである。尙終に當て一



言するが自然の美に對する鑑賞若くは家族生活の單純なる樂などいふとは現代小説家の顯はれる迄はスベーン文學に全然見る事を得なかつた。

スラヴ思想の特質はその民族に對する深き愛情と、それに從つて起る歴史に對する愛好心、並にその想像力が、凡ての觀念若くは感覺上に關する一時的或は永久的の印象を極めてよく感銘する事及びその無限の感受力にある。なほその上に極めて重大なる心意上の特色は何事に對しても深く且つ固く道德的問題にその心を浸して居るといふ事である。ロシアの思索的人物は其最も下層のものから最も偉大なるものに至るまで、それが小説等の人物にせよ、實際世界の人にせよ、人類に對する個人の博愛的精神を以て充ちて居る。自分の村のもの、同市府のもの、その同族若くはその郷土以外の人々、世界の他の部分に住めるもの、即ち凡て自分と同じく喜び自分と同じく悲しむ人々に對する自分の義務は何であるか。これがロシア文人の潜心した處である。ロシア文學が凡ての個人的社會的、並に政治的觀念をこの博愛の一點に集中して居る事は、新聞雜誌に關係せる人

人、批評家その他スラヴ思想を精密に究めたものゝ全然一致する處である。ロシアは縱令大哲學者を出さずとするも、其文學上の作物に依て複雑なる思想を有する眞實の人物を示して天下の賞讃を博して居る。斯くの如き作物は或は同情に依て成り或は深い研究に依り、其小説家若くは戯曲家に依て作られたものである。ロシアに哲學者のないと云ふ事に就ては一の例外を擧げなければならぬ。即ち現代の文人ソロヴィエフ(Soloviev)で、其威嚴と勢力は非常なものである。其哲學的觀念はシェーリング、ヤコビ、ヘーゲル、スウィーデンボルグ(Böhme, Swedenborg)及び中世の師父並に新ブレト派から來て居るのである。且つそれ等小説家の内にもトルストイとドストイエフスキは人間の肉體的道德的性質の最も細微なる經驗を出來得る丈け深く出來る丈け廣く縦横に分解して之を世に示した。吾人は更に委しく人種上の智力を比較し、また文學の上に顯はれた各人民の思想と能力の相違とを充分に分解して見たいと思ふ。併し問題は餘りに大きく吾人の識見が不足である事を恐れる。

## 國民相互の影響並に反應

吾人は既に述べた通り或る一國の民の世界史に於ける將來に關しては多少之を豫知する事の出来ない事もないのである。それは即ち其國民の特質傾向から察しられるのである。

イタリヤはその詩的藝術的天才を有して居る事を誇りとなし得べく、フランスは高遠なる學説を出し、且つ趣味の點に於ては殆ど君主たるの權を持つて居り、イギリスはその常識と實際的な特長を有し、ドイツは飽くまで研究を盡し、考案に妙を得、且つ學識に富める演釋法に於て秀でて居る。またオランダに至つては哲學者の郷土とも言はれる程で、智力の世界には自ら主上權を持つて居ると考へて居る。此オランダはグロウチニスやスピノザ(Groenius, Spinoza)を出した處であるが、自然は此國に與ふるフランス人の優美をも以てせず、イギリス人の聰明をも以てせず、抑亦イタリヤ人の敏捷をも以てしない。併しそれを贖ふ爲めに自然は明快なる心眼と、其歴史並に其文學に明かに觀取される正義の感、を此國民に與へた。オランダ人は自ら斯くの如く考へて居るのである。尙注意し置くべき事

はオランダに於ける普通教育なるものが歐洲の何處よりも高い程度にあるといふ事である。彼等オランダ人はその國民的理想、國民的宗教、其獨立といふ事を固く守つて居る。がそれと共にその心意が豁達である爲め他の國民よりは更に世界的である。即ちそのロッターダムにはイギリス思想が行はれて居るし、又アムステルダムは全くドイツ式の都である。オランダ人は性質は恬淡であるので、その三大隣國の長所と缺點とを緩和しながら且つそれを自らに受け入れて居る。茲に注意すべき事はオランダが各方面にその科學的、商業的、活動の結果を廣げて居るといふ事である。併し文學上には一向にさういふ活動がない。オランダには随分文學上の作物があつた。ゾンデル、ビルデル、ディジュク、ヤコブ、ウアン、レンネップ、ムルタチク等はその著名なるものであるが、その詩人小説家又は歴史家の努力の跡は外國に移植されなかつた。只僅かばかりの響が國境に聞えたのみで、その著作は狭い本國の内に制限されて居り、其一種たりとも歐洲全部に廣がつたものはない。——斯く言ふのは想像的作品をいふのでオランダ國人であるエラスマスやグロウチニスの著作の如きは、學問社會に迎へられて居る事無比と言ふべ

きであるから、それ等の作物に就て云ふのではない——此孤立は一つはその言語上の困難と又一つは文人の餘りに冗漫に、細微な事を正確に書かんとした缺點に歸すべきものであらう。なほ進んで云へばこれは其國民性に依るので、オランダ人は實際的實際的觀念に富んで居て、空想にかけるといふ様な事はその短所であつたからであらう。なほ今一つ其理由を云へば宗教的精神が人心を狭い範圍の内に圍み、廣く活躍させなかつた爲めであらう。

凡そ何れの國民も個人と同じく其發達の初期に於て特別なる傾向その特色たるべき印象を受けるものである。また凡ての國民は多少その國民的若くは世界的名聲を博するに足るべき事蹟をあげんとする野心を示すものである。自ら撰民と考へ、救世主を出し、世界を救済しやうといふやうな考を抱くのは常にヘブライ人のみではない。ギリシア人は自ら人類の教育を以て任じ、藝術と學問の勝利を世界に教へた。東洋に至つては其古きを誇り且つ凡ての人種の本源であること考へて居る。エジプトのサイヌの僧がソロンに向つて、アゼンスの人よ、諸君は實に小兒に過ぎぬ、と云つた事があるが、それよりも更に大なる威嚴を以てインド

のプラトマ教の僧は近代の歐洲に對し同じ言葉を繰り返し得るであらう。ローマ人に至つては自ら王公たるべき人民と稱して、その名譽に對しては少したりとも他の容喙を許さなかつた。さうして野蠻人に依つて侵入されるに至つても尙その王位を退かず、終に帝國の崩潰するに及ぶやその永く維持して來た現世に對する統治の權を放棄するの止むなきに及んだ。が併しそれと共に直ちに法皇政治なるものを建立して精神界を統治し始めたのである。イギリス人は海上の覇權を握り且つ遠隔の地に殖民する事を以て自己の特權となし、且つ永久にこれを吾ものとなさんと考へて居り、アメリカはその偉大なる各州を以て一つの演劇場となし、茲に進歩の芝居を演ぜしめ、凡て精神上並に實際上の事物に對しあらゆる自由を完全に發達させんと欲して居る。アメリカの文人の書くもの並にその政治家の論議は常に力行的生活をなすやうに、人民を鼓舞して居る。これは彼等米人が文化の高度に達し世界に於ける最大國民となつた爲めである。

〔前大統領ルーズベルトの力行的生活 (The Strenuous Life by President Roosevelt) 参照〕或る哲學者の言葉に依ればアメリカ人にして其眼中多少かの無制限なる個人主

義並に無限の發展を望むの理想を抱いて居ないものはないといふ位である。ドイツに至つては又今日ほど自ら科學的的使命を帯びて居ると確信して居た時代はない。恰もルーテルの時代に於て宗教改革の使命を帯びて居た事を確信して居たと同じ程度である。かの鐵血政略に依つて帝冠を得た以前既にドイツは智力上の主權を自ら掌握し、その學者哲學者等に依つて自ら學界の王冠を被つて居た。最後にまた現時のフランスは如何と見るに、各方面に於て疲弊し制限されて居るに拘はらず、なほ其觀念に於て文學藝術に於て並に其勢力の世界的なる點に於て第一流の位置にある事を自信して居る。

重ねて言ふが、實際に於ては智力上絶對的最後の主權を持つて居るものはない。古に於ては榮えて居た文明は一步一步その光榮の地から下つて終に消散した。アゼンヌ、ローマ、アレキサンドリア、コンスタンチノープル、バグダッド、レオ第十世時代のイタリヤ、チャールズ第五世時代のスペイン等は前後して世界の表面からその光榮を消されてしまつた。斯くの如きは吾人が過去に就て學ぶ處であるが、偕て將來に就ては吾人如何にして來らんとする神祕的な變化を豫測する事が

出來やうか。文學に至つては大どなく小どなく相互に働き合ひ、互の思想や觀念が或は入り交り或は借用し合ひ極めて複雑なものとなり、或る一國に固有なる純粹の思想を認め、或はまた或る一事件を以て正確に某々國の運動であるといふやうに歴史に明記する事は困難であるやうになつて來た。而かも其相互に相互に依りて居る事は明確に看取される。併しギリシアに始まつて以來今日に至るまでの文學上に於ける其關係、即ち文人相互若くは國民相互の影響し合つた跡、互に思想を貸し又借りた事の跡を尋ねんとすれば、實に浩瀚なる書物の幾卷を要するのである。

## 七

## 相互模倣の結果

前段述べた通り文學史を辿り各文學が相互に受けた影響を細密に記すと云ふ事は殆ど不可能の事である。併しこれを瞥見するに、吾人は先づ東洋の文明に於てインドの傳説が各種の物語りや歌となつて世界文學の財産を充たした事を認める。また更に一方の藝術世界を顧みると、其處にはフェニシア人、ペルシア人、ヒッ

タイト人等があつて、是等が殆ど其凡ての文化をエジプト及びアッシリアから借りて居るのを認める。更に又近世の諸國民に至つては、ギリシアの資源から多大な影響を受けて居る。ローマの智的發達は時を隔て、幾度かの時期に於てなされて居るが、要するに全然ギリシアの模倣に依つて成されたものである。例へば、フェドラス (Phaedrus) はローマのインップたらんとしたもので、またヴァーギルはそのホーマーたらんとし、テレンス (Terence) はそのメナンダーたらんとし、ホーレースは其ビンダーたらんとしたものである。併し只ローマに一つ異彩を放つた文藝があつた。即ち諷刺がそれで、是丈けはローマ人が模範を後世に残したものである。中世になつてはフランスのシャンソンド・シメト (この武士の歌はジョン・リール、ソルニヤン (Jonghins, Trouvers) 等の行吟詩人が其材料を得た資源である) が全歐洲の想像を樂しましめ、アイスランドの住人からコンスタンチノープルのギリシア人に至るまで皆之を愛誦した。又中世に於ては永い間詩人ペトラーク、クリスチン・ド・ピサン、ジョーサー、クレメント・ペラーチ (Petrarch, Christine de Pisan, Chaucer, Clement Marot) の如き最も秀れた詩人などがその感興をローマン・ド・ラ・ルーズ (Roman de

le Rose 薔薇物語) から得て居るが、それと共に同じく中世の傳説を書いたファブリオ (Fabliaux) の著者はアラビア人及びユダヤ人に依つて世界に知らされた東洋の傳説を模倣するに躊躇しなかつた。なほ又南歐のツルバドールの事に就いて言へば、彼等は其の歌題若くは音律上の形式のみならず、又その詩的感興をスペイン及びイタリアの詩に傳へた。イタリアはその特別な詩を得るまでは此種のフランス並にプロヴァンスの詩を以てその生命として居た (ツルバドールは即ちプロヴァンスの詩であるからである)。さうして此種の詩は封建制度の歐洲に喜ばれたのである。

文藝復興期に至つては全然古に模倣する風があつた。當時の人は古人が既に何事もなし遂げて居て自分等は只それを模寫すれば良いのであると考へて居た。ロンサール、バルーフ、ヨアキム・デュ・ベニー (Ronsard, Balf, Joachim du Belley) の他後に至つてのベルトリー、デポット (Bertrand, Desportes) 等は全くイタリアの人文主義の徒となつてしまつた。スペインは他のラテン同族の爲めに幾多の問題を授けたのであつたが、忽ちにして其文學的政治的勢力はルイ第十四世の時に閉息してしま

つた。かの大膽と自信とを失つた十五世紀に於けるが如くスペインは凡ての者を他から借り、其以前にスペインから影響された其國々に隷屬する様になつた。それ故其戯曲の如きも全く翻譯に過ぎなかつた。イギリス文學に於て吾人は二派を認める。一つは全然アングロサクソンで極めて創意に富んで居り、自然に又精神に充ちたものであつた。なほ他の一つは十七世紀のフランスに於ける文學的主動者の影響の下に起つたものである。後者は前者に比すれば更に優美に思慮に富んで居るが、冷かにして創意力を缺いて居る。併し其代りにはその感興の本源なるフランス文學の如く典雅と趣味とに富んで居る。吾人は之をアングロ・フランス派と呼び得るであらう。

更に十九世紀に移つて、歐洲の諸國を一束にして考へて見るに、ドイツ、ロシア、ノルウェーの諸文學はみな模倣並に翻譯といふものに富んで居る事を認める。殊にロシア人の如きは最も盛んに他の文學に模倣して居て、其最も緊要なる自ら發見するといふ事はないのかと思はれる位である。吾人は今終りに當つてブルネチエー (Ferdinand Brunetiere) の言葉を引ひて、此章を結ぶ。曰く、此最終の二三百年間

歐洲の大文學の間には思想觀念の交換があつた。吾人は之を事物の變遷といふ。その事物は之を擴大し得べく又各種の感銘を受くるに足るものである。斯くてそれは實際に於てスペインよりイタリアに遷り、イタリアよりフランスに、フランスよりイギリスに、また逆にイギリスよりフランスに遷り、終にはイギリスよりドイツに、ドイツより又フランスに遷り、その變遷の度毎に各國民の性情を感受したものであると。

## 八

世界に群れる各種の觀念、斯の如きは果して進歩を豫告する者なるか

幾多の國民が互に上記の如くに、密集し結合して來ると、個人の團體の如くにこれが一つの集合した存在を自覺するやうになる。其内には親しい友もあれば敵もあらうが、互に接觸する點に於て一つの集合體であるといふ感を抱くやうになる。これは實際の生活上には非常に利益のある事である。併しながらそれは文學藝術に最も缺くべからざる特色といふ事を妨げるものである。

既に述べた通り各國の智力は各の特徴を有し各文化の特色を現はして居り、自然に依て邦國の分れて居ると同じ様にそれ／＼別種の文學を持つて居た。然るに現代になつては人間が其力を時間と空間との上に及ぼし先づ國境なるものが撤去されるに至つた。否國境は存在して居てもそれは只無意味なもので、關稅を取らざる處としか考へられず、思想の上には何等の力をも持つて居ない。更に大洋を以て分界されて居る處は商業に依り又思想の交換に依て一層互に近接する様な有様になつた。従て國民個々の特長は消失する様になつた。要するに近代思想の大波は四方を廻て各人種初代の特質を其渦中に沈めてしまつたのである。さて多くの人は世界が常に進歩して居ると考へて居る。而も一直線に進んで行くやうに考へて居る。併し果して世の中は常に進んで行くのであらうか。時に退却する事はなからうか。或る時期は光榮の時期である。或る時期は文華煥發の時代であつた。併し或る時期は暗黒な時期であつた。無知盲昧の時代であつた。ステール夫人の説に従ふと、世の中は螺旋狀に進んで行くといふ。これは迂餘曲回して進むといふ意味で、絶えて退歩する事はないといふのであらうか。これも果し

てさうであらうか疑はしい。或る時代には進歩の全く止る折もあれば退歩する時もあらう。凡て斯かる意味の進歩といふ事に就ては多少考へて見なければ明答は與へられぬと思ふ。

古代の人々は進歩といふ事を信じなかつたらしい。吾人はホーレースがローマ人に人類の衰亡といふ事を説いた事を知つて居る。素よりこれは餘りに現在に重きを置き過ぎ、將來を輕視し失望した言葉である。然るに近代の哲學は斯くの如き説を斥け、自己の繁榮並に國家の隆盛に就いて希望を抱かして居る。併し餘りに希望を持つのも果して正當な見方であるか疑しい。進歩といふものは天の法則であつて、吾人の運命は一貫して變ずる事なく、當來の人々は過去の經驗を積んで來て居るもの故必ず秀れたものであると、斯く考へるのは餘り樂觀に過ぎはせぬか。素より科學の見地から言へば人は絶えず進歩して居るものである。これは明白な事で、科學から見れば人は日々に自然と物質の力を制御して行く。殖産の道は開け智識は増加し、藝術は發達する。併しながら道德上並に智力上から言へば人の腦力は古と今と變化はない。吾人は吾人の祖先と同様な

誤りをなす。古人の行つたやうな罪惡を行つて居る。さうして吾人の希望に於ても古人の持つて居た希望と少しも變らず、智識の量に於ても少しの相違もない。左う考へて見れば如何なる點が吾人の祖先に勝る處であらうか。文明は大濶歩をなして居る。併し爲めに吾人の生命が長くなつたであらうか。又吾人は幸福になつたであらうか。

吾人は或は海の侵入に對して溝渠をつくり、河川の水力を利用し、若くは山脈と貫通し、太陽の重量を計り、夜の爲めに新たに夜の太陽を創造し、時間、空間の微妙なる奥にまで突入したが、なほ吾人の周圍には古の人の見たと同じ様な不幸があり、不安がある。吾人は是等に對して古人よりは心痛を感ずる事が少くないであらうか。ラマルチンの言葉をかりて言へば、吾人は舊約書のヨブよりも深く考へ、孔子よりも道理を解し、プレトーよりも氣品高き思想や詩を持つて居るのであらうか。吾人はホーマー、ヴァーヅルよりも神聖なるものであらうか。抑、デモスセネス、シユジデス、シセロよりも雄辯に語る事が出来るのであらうか。

斯く考へ來らば吾人は只失望するのみである。果して進歩なるものがあるか疑

はざるを得ぬ。特に近代の状態を見れば社會は暗澹として道德の力は失はれ、將來に對する希望は全く消散してしまつて居る。吾人は茲に於てハーバート・スペンサーの言葉を思ひ出さざるを得ぬ。スペンサーは誤謬と科學との争に於て眞理の勝利を期して居たのであるが、その最後に當つては余は無益な働をなした。余は自分の力を目的のないものに浪費したと云つて居る。スペンサーは文明の惡を見たのである。彼は美の殘はれ、藝術の汚されるなど現代の惡事を見て、更に言つた。所謂愛國主義は惡魔主義である。實際帝國主義は耻辱たるべき戰爭を起した。彼は凡ての惡事を見て、偕て世界が野蠻時代に返るのであるとなし、遂に自分の死の近づくや世界の衰亡を唱へたのであつた。

只前段陳べた通り科學の見地から言へば正しく進歩はあると云ひ得る。この科學の進歩に依つてまた人間の道德を高貴にする各種の働きが出来来る事であらう。さうしてその各種の働きの様々の結果から國民が相互に結合し、その利害を一にし、また言語思想をも一にするやうな時代に到達し得るかも知れぬ。斯く考へて見れば東洋と西洋との近接もその一つの顯象であらう。或る國語が殊更に



用ひられるといふのもその徴候の一つであらう。斯くの如くして進んでは國民の二三が列國の内に勢力を占め、凡てを統一するやうにならぬとも限らぬ。併しながらその凡ての統一の前にはその二三の國民の間にまた競争が行はれて、よし領土の争はないまでも風俗習慣若くはその言語上に於て互に勢力を得んと争ふであらう。その實例を擧げて見れば、南阿戦争に於てその最も明白な例證を擧げたイギリスの帝國主義、ドイツが四隣に示して居る大ドイツ主義の有力なる發達、ロシアをして或は歐洲の方に或は亞細亞の方に動かして居る大ロシア主義の悠々たる運動是等はみな列強が如何にその政治上の勢力、個人的特長、並にその言語の勢力を世界の上に伸張せんと欲して居るかを示すものである。

## 九

世界に互りて各其範圍を擴めんとする各國の言語及び文學

## 競争の

歐洲諸國が何れも他國を排し自ら優勢ならんと欲するその競争の第一の特徴は、言語の力に依つて其勢力を擴げんと欲する處に存するが、その効果に至つて

は様々である。單に數量の點から言へば、英語及びスペイン語の活動範圍は最も廣く、フランス若くはドイツに比して勝つて居り、之をイタリア、ギリシア、スウィーデン、ノルウェー其他の諸國に比すれば更に遙かに優勢である。英語を話す國民は五大洲に廣がつて居り、其内には北米合衆國も含まれて居るが、此國一つでも近き將來に於て英語を話し且つ書き得る人民の數は二億に達する位である。要するに英語は全世界に互つて話されて居り、大洋に接する所謂邊海の地、到る所に行はれて居るのである。ヴィクトリア時代即ち凡そ六十年間に於てイギリス支配の下にある白人殖民の數は百二十五萬から一千百萬に上り、イギリス母國の人口は二千六百萬から四千萬に殖えて居る。インドは計算に入れぬとして、カナダは五百萬の人口を有し、オーストラリアも殆ど同様の人口を算する。また殆ど百萬の歐洲人がアフリカに於けるイギリスの領土の内に住んで居る。計算に依ればカナダ、オーストラリア及び南アフリカに於ける廣漠の地は幾億の民をも容れるに足るといふ。而もそれ等が他日その言語と文化とを一にして合同する事であらうといふ。

スペインに至つてはその歐洲に於ける土地は制限せられて居るが、其外にスペインはキエフといふ人口多き土地を持つて居り、又その國語を話す處には北アメリカにメキシコを有し、南アメリカに於てはグイアナ及びブラジルを外にしては、凡てスペイン語を用ひて居る。其數は八千萬から一億に達する。併しながら土地の廣大なる點から言へば、イギリス、スペイン共にアジアに於ける支邦と歐洲に於けるロシアとの兩巨人には及ばないのである。

十八世紀及び十九世紀の歴史に於ける最も切要なる事實として而も重大なる結果を有するものは、ロシアの權力の非常なる發達並に其大活動である。例へば其政治家ポビエドノスツフ (Pobiedonostzeff) の如き人の聲は世界をロシア化せんとするの概がある。又ロシアの文人、新聞記者の勢力は近き將來に於て歐羅巴人の發展に關して大事件を起さんとして居る。その人口の數字上の發達すら此百年以内に於て驚くべき比例に達した。實にロシアの言語は地球の七分の一の範圍にまで廣まつて居るのである。

フランス語に至つては必らずしも近き將來に於て幾百年の間維持して來た其

位置を失ふの恐れはないであらう。また文學藝術及び外交上の用語として支えて來たその思想上並に權力上の優越權を失ふやうな事はあるまい。地理上から言つてもその近親の國民、例へばベルジュームの如き、スウヰツルの内のフランス語を話す部分の如き、またアフリカのサハラの地方、中央アフリカ、アジア及びインドシナ等に於て用ひられて居る。其上なほフランス語は歐洲の西部に廣布されて居るのみならず、東部のマルモラ海、ボスフォラスの沿岸に集まる人民の間にも相互の交通語として用ひられ、又列國の教育上に於ては第一に教授さるべき言語と認められて居る。

一八八〇年以前にあつてはドイツの歐洲以外に持つて居た領土は極めて僅少であつた。然るに二十年後の一九〇〇年に於ては千六百萬の人口に依つて占領されて居る百五十萬平方哩の上にその國旗を翻へして居る。而も此内にはブラジル及びパレスチナに居る其殖民は計上されて居ないのである。斯くの如きはドイツ國民に依て示されて居る非常な發達で、殊にその殖民的膨脹に關する活躍に於て示された其發展は吾人をしてドイツ語の進運が異常であるといふ事

を認めしめるのである。併しながらそれもロシア及びイギリス語の有して居る進運の機會と比べればなほ遠く及ばない處があるのである。之に反してイタリア語に至つては、その實際の地理的制限以外に延びるといふ望はないらしい。世界を一貫して見るに或る邦家は其位置を失ひ、列國の間に於ける權力の平衡を破る様な形勢が見える。而して第二流の國語は偉大なる廣がりなさんとする大勢力の内に呑み込まれんとする形勢がある。例へばトルコの如きはその古の勢力は莫大なもので、一度びはヴェナの城壁にまで迫つて來た位であるが、今や再びその活氣を示す事は出來ない様になつてしまつたのみならず歐洲に於てトルコを形成して居るその内の幾多の小國は皆ロシアがギリシアかに化せんとして居る。又アラビア人の王國は中世にあつてはバグダッドからスペインにまで廣がつて居たものであるが、今はアラビア本國に加へて、シリア、エチオピア、エジプトは半ばイギリス化して居るが、トリポリ並にチュニス、アルジェリアの大部分、スダン等の地を併有して居る。併しなほ昔の隆盛を見る事は難く、その勢力は嘗てキリスト教徒として斥けて居た歐洲の思想の爲めに侵畧されてしまつた。

更にペルシアもかのバグダッドに於ける回々教主領の敗墟の跡に建立したその王家の盛時を再び招く事は出來ない有様に居るのである。殊に今日のペルシアはロシアとイギリスといふ相敵視して居る二大勢力の爲めに壓倒されんとして居る。即ち北にロシアはその領土を蠶食し、南にイギリスはその海邊を壓迫して居るのである。由來ペルシア國民は非常な元氣に富んで居るのであるから、その邦家が地圖の面から消滅する事はないであらうが、恐らくは上記二大國民の戰場となる不幸を見るであらう。此他アジアの國語にして失はれるものは多々あるであらう。而して其國家も何等の言ひ傳へをさへ残さず滅びてしまふものが多いであらう。千九百年頃に於ける歐洲及びアジアの言語の發達に關する統計を比較して次の數字が得られた。即ち英語を話す人民の數一億千六百萬、ロシア語八千五百萬、ドイツ語八千萬、フランス語五千八百萬、スペイン語四千四百萬、日本語四千萬、イタリア語三千四百萬、支那語三億六千萬といふのである。但し此統計は各國語の用ひられて居るその領土の範圍の不同であるといふ事は考量の内に入れて居ないのである。

之と共にイギリス、スペイン、ロシア、フランス、ドイツ及びオランダの勢力の擴がるにつれ、歐洲の學問が世界の各部に行き渡り、一般の進歩の上に著しき刺激を與へる事になつた。

永い間アメリカとオーストリアとは舊世界に對して同様の立脚地に立つて居た。そして舊世界から其文明の優越權を奪はんとする野心を明かに示した。其内にも英語を以て用語として居るアメリカは長足の進歩をなすであらう。殊にかのパナマの運河開鑿事業は莫大なる金額を呑み込んだものであると共に、また交通に便宜を與へることは非常なものであるが、一度之が開かれて船舶が自由に大西洋と太平洋との間に交通し得るに至ればアメリカの開ける事は益、速かに、その進歩は更に數段を加へる事であらう。これはゲルマンといふ人の説であるが、此人は更に次のやうな事を言つて居る。シェークスピアの用ひた言語は如何なる廣漠の地を横行する事であるか。シェークスピアの知らざる遠隔の地に於てその著作は讀まれ、又意外なる劇場に於てその脚本は演せられ、又それが模倣される事であらうよ。また一方にインドには二億から三億に及ぶ人口があつて

イギリスの力を以てしても之を制御し兼ねる位であるが、而かも歐洲思想は絶えずその内に行はれて居る。一八七一年に當つては既にインド人の新聞にして「半開」といふ自分等に與へられた稱號を排斥し、インドは支那よりも又ペルシアよりも遙かに文化に進んだものであると言明したものとある位である。

吾人はインドの各州に於けるその智的生命に就て明瞭なる考を持つて居るべきである。インドの各州に於てはそれ／＼の州の言語が公立學校に於て保存せられ、生徒は之に依つて歐洲の風俗學問並に道德思想を紹介されて居るのである。がインド人は家庭に於ても、風俗制度に於ても並に家族的生活に於ても、全くイギリスの影響を受けずに居るのである。併し近者インドの中心から改革者が起り、彼等は演説に依り若くは著書に依り歐亞兩思想の融合を計つて居る。インドの地は神聖な地である。彼處に古の Aria 人はその叙事詩を歌ひ、神々の傳説を編み、文典を作成し、幾多の哲學を案出したのである。蓋し歐洲の森がまだ野蠻の民を以て蔽はれて居た時に當つて、既に此偉大なる天然に養はれた民の間には感興の泉が湧くが如くに流れ出て居たのであらう。

又轉じてアジアの中央部を見れば次のやうな問題が起つて来る。即ちラインの地は如何なる智的發達をなし得るであらうか。又ベルシアは智力上の事に就いて如何なる趣味を持つて居るか。最近五十年間に於て此國には如何なる宗教的革命があつたか。それ等の事に就てはなほ中央アジアの宗教並に哲學に就て一瞥を與へる必要がある。

吾人はまた屢支那文明の特別な顯象に驚かされる。支那の文化は極めて早くから起り、印刷石版の術その他の發見に就ては遙かに歐洲に先立ち、また極めて進歩したる文學を有して居た。然るにそれが突然停止し、一步も進まず、全く化石したやうに只古を尊崇するやうになり、その將來の門を閉ぢ、進歩の法を斥け、正義協同の考を排し、全く國運の進歩を勵ます新刺激を拒絶してしまつた。斯くの如きは過去の支那幾百年の事であつた。併しながら斯くの如き状態は縱令現在變化して居ないまでも、遠からず變化するに相違ない。頑強なる抵抗のあつたに拘らず西洋の思想と風俗とは此老大支那帝國の邊陲にまで突入して居り、應用科學器械學若くは器械製造の術は著しき速度を以て進歩しつつある。なほイギ

リス、フランス、ドイツの教師の指導の下に支那の教育そのものが既に變化を受けて居るが、その徐々として而も確實に行はれるので舊式の慣習も是等の改善を妨げる事は出来ない。要するに此過去の傳説に捕はれ蹂躪された偉大なる國民を近代の進歩の方に導く運動は明白なる事實である。蓋し支那が舊來の夢想より覺め、道徳上、政治上、智力上に變化を受けたならばその勢力は如何に偉大なるものであらうか。いろいろの便宜を有して居るので、世界の文化の上には縱令之を左右する程の位置にならぬまでも、注目すべき位置は取るに相違ない。此四億の民をかゝへた支那は縱令その智力の點に於ては劣る處ありとするも、連續したる領土を有して居るので、イギリス帝國の領土の歐洲亞細亞亞弗利加及び亞米利加に分れて居るのとは大に趣を異にして居る。權力の平衡といふ點から考へても等閑に附せらるべき國ではない。支那に續いて極東に歐洲と亞米利加の教師が利害を同うして相聯合し以てその四千萬の民を近代の文化に導いた國がある。それは即ち日本の人民である。日本は歐洲の教育法を受け入れ、その功果を收め、遠からず西洋の學問と比肩し得るやうにその學問を發達させた。かれ等

日本人は東京の大學がパリの大學と同じ程度にあると考へて居る。一般の發達を十分に考量した批評に依れば、歐洲亞米利加の最も著名なる文士と現代日本の有名なる詩人、小説家、辯士若くは論文家とを同列に置いて見て差支ないといふ。なほ此聰明なる國民は太平洋の沿岸に於て商業上並に政治上に優勢を得んと欲して居る。而かも前に述べた通り、此國民は世界に於て最も多量の書物を出版し、なほその出版數に於ても一八八〇年と一九〇〇年の間に於て五倍の増加を見たのである。政府は日々に學問を奨勵し、才能あるものに保護を與へ、教育の源を養つて居る。それ故に日本が其國內に於て並に廣く世界に於て注目すべき活動の中心たらんとして居る事は何人も疑はざる處である。

日本の文人と歐洲及び米國の著名なる文人と同列に置て見て差支ないといふ點に就て、著者は面白い對照を示して居る。以下著者の言葉である。例へば論文家は日本に澤山にあるが、それだけに就て比較して見るに、有名な福澤は米國のヘーリンソンに比べられる。また漢文若くはその模倣を復興させた田口卯吉は世界的哲學者の稱號あるドイツのエンゲル(Engel)と比較されるべく、道德的審美的

の事に筆を染めた文人志賀はイギリスのサムエル・ジョンソンに、また詞藻花の如き福地はフランスのアルフオンヌ・カー(Alphonse Karr)に比べられるであらう。併し更に考へて見るに斯くの如き比較は寧ろ新奇を好む處から起つたもので、あまり誇大にした鑑賞であらう。また餘り甚しい賞讃である若し吾人博士井上哲次郎を以て江戸の立派なる批評家として國民的自誇の念を以て盲目となつて居ないとするれば、其説の通り日本文學にはなほ改善すべき處が多くある。日本には散文家が多いが、何れも特長のないものである。その詩人に至つては大膽なる想像の飛躍には富んで居るが高遠なる思想には缺けて居る。脚本に至つては舊時の如く殘忍な所作や所謂芝居らしいものに限られて居る。小説は昔日よりは流行して來たがなほ舊式を脱しない。日本の批評家はその國人の爲めに廣く且つ深い修養を望み、且つその文人の爲めに人情の深きをさぐり、自然に對する深遠なる研究を求めて居る。——一九〇三年日々新聞の記事に依りたるもの——斯んな面白い事を云つて居るがこれは只一興として茲に譯出したのである。遠き古に於けるアレキサンダー大王の勝利も、亦近代に於けるイギリス、ロシア

兩國の努力も、東洋の思想を改めるの効果を得なかつたといふ事は往々人の説く處であるが、その思想の改造も緩慢ではあつたが然し確實に進歩的に諸方に行はれた。只獨り日本のみは頗る急速に行はれたと云ひ得る。東洋と西洋とは永い間分離して居たのであるが、今や凡ての點に於て一致した。幾世紀間養はれた敵意は今や消散して行くのである。

今述べた通り現代に至る迄人類は二つの並立して相敵視して居た潮流に依つて分たれて居た——即ち歐洲的と亞細亞的との二流である。此争は太古の文化發生時代から既に始まつたものである。紀元前第五世紀にヘロドタスは凡ての歴史を以て亞細亞に對する歐洲の戰、即ち野蠻人に對するギリシア人の戰であること云つて居た。ホーマーの詩に於ては此戰がギリシアとトロイとの不朽の戰に依つて顯はされて居る。トロイの城塞、イリアムの陥落以後も歐洲の精神は東洋に對して戰を開き、之を侵略する事を止めなかつた。それ故に時日の經るに従つて或はベルシアの征服となり、小亞細亞への殖民となり、タウラス山脈の險を越える事恰も櫛壁の如くにしてインドに侵入し、パクトリアをギリシアに服従

せしめ、其他多くの帝國をローマ帝國の下に一統するに至つた。これは皆歐洲が亞細亞の上に加へた打撃である。此處に於てか吾人は西洋が東洋を抜き去り、その世界の文化に於ける相續權を奪ひ、以て人類の運命を左右したと云ひ得るのである。只ミスリダテスの時には亞細亞も一時興起してその復讐をした事があるが、再びヘリオガバラスとコンスタンチンの下に歐洲は亞細亞の上に襲撃を試みた。併し此時から歐洲はローマ帝國の敗墟の跡に起つた各人種の形をつくる事に潜心したので、其間にマッサルマン帝國が東方に起り、それが歐洲に侵入した。それが爲め西洋のキリスト教國は一時退却せざるを得なくなつた。アラビア人のスペイン占領がそれである。其後又アラビアはスペインから逐はれ、その他の方面にも一興一敗があつて遂に現狀に到達したのである。

爾來西歐は益々東洋の方面に力を得てその勢力を逞しくして來たが、最近に於て一大異象が顯れた。ロシアなる巨人に對して日本が大膽なる戰をなしたので、世界は一時驚倒された。此兩國はその等しき武力、等しき艦隊、等しき陸軍、等しき大砲等しき戰術を以て相會した。歐洲の列國は片唾をのんでその結果を見て居た。

そして更に此東洋の一島國が偉大なる功果を示したので再び驚いた。併し戰の如何に關はらず西洋の思想はその智力と道徳と殖産とに於て世界に勝利を博して居る。殊に極東の地は全く西洋の感化を受けて居る。斯くの如くにして東西兩洋は今や相會し、一致して手を握り合つたのである。

哲學者にして又地理學者なるレクルス (Reclus) が云つて居る。歐洲とアジアの人民は以前互に別世界に住んで居た。さて今日に於ては北米合衆國は歐洲からの移民に依つて成立し、此處に新しい歐洲が出来たやうな有様をなした。今支那の地位を見ると、此帝國は新舊兩世界即ち兩歐洲の間にはさまつて居る。即ち此帝國には東西兩方から同じ思想同じ手本が押寄せて行くのである。實は世界は狭くなつて孤立の文化をして存在せしめぬ様になつた次第である。而して小文明は大文明の内に併吞せられるのである。斯かる勢であれば東西兩方の争は避け難い處である。尤も争を云つても昔日の戦争ではない。勞働の争、感情の争である。兩者が互に自己の利害を打算して進む場合には其争は避け難いところである。

蓋し斯くの如きは兩方が一致統一する前に於て避くべからざる處であらう。或る説に歐洲の休止といふ事を知らぬ民と支那の停滞した保守的人民との會合は實に吾が地球の歴史に於ける最大な事實であらうと云ふ事があつた。蓋し事實はさうであらう。而して東西兩世界の會合から起る第一の事件は、經濟上、財政上並に政治的社會的の危機であらう。併しながらそれ等の争のあるにも拘はらず、早晚智力上の一致は平和の世界に行はれ、それに依つて人種上の觀念並に道徳上の標準はそのまゝにありながら、人間は互に相容れ相協同して行くやうになるであらう。

## 十

## 智力の競争に關しての最後の言説

要するに吾人は一致終局に近いて居るのである。此一致に對しては各方面にいろ／＼な努力が行はれて居る。例へば勇敢なる旅行家は或は自家の望から、或は政府の希望から、未知の海陸を探検して之を地理上の領土に收め、更に歐洲の生産を吐き出す口となさんとして居る。斯くて應てはパリも、ロンドンも、セントピ



「タイヌボルグも、ペキンもメルボーンも、横濱も、サンフランシスコも、ニューヨークも、只一大全部の一局部即ち世界の市場となり、世界を通じての需要と供給とが一致するに至るであらう。

従つて文學も藝術も殖産も商業も國家といふ狭い制限を日々に消滅さして行くであらう。同時に個人の特性といふものは失はれて行くかも知れぬ。併しそれは進化の理法で已むを得ぬ處である。一言にして言へば智力上の世界主義が勝利を占めて國民的相違を平均するのである。タイプは失はれ、特色は消え失せ、甲は益、乙と同じ様になり、旅行家は世界の何處に行くも同じやうなものゝみを見て、古の學者が探検して知り得た様な異つたものには接しない様になるのである。文學に就ても一國の特色は只其記憶に残るのみとなるのである。そして結局世界主義萬國主義は必らず近代思想の生命となるのである。

# 比較文學史終

明治四十三年二月十五日 印刷

明治四十三年二月二十日 發行

比較文學史

非賣品

(第十九回配布分)

編輯兼發行者

大日本文明協會

右代表者

磯部保次

印刷者

神谷岩次郎

印刷所

東京印刷株式會社  
東京市日本橋區兜町二番地



發行所

大日本文明協會

電話新機 二四四一  
一四九四  
三三六八  
〇九二六

振替貯金口座 一三七〇

東京市京橋區南鍋町登丁目貳番地

大日本文明協會役員

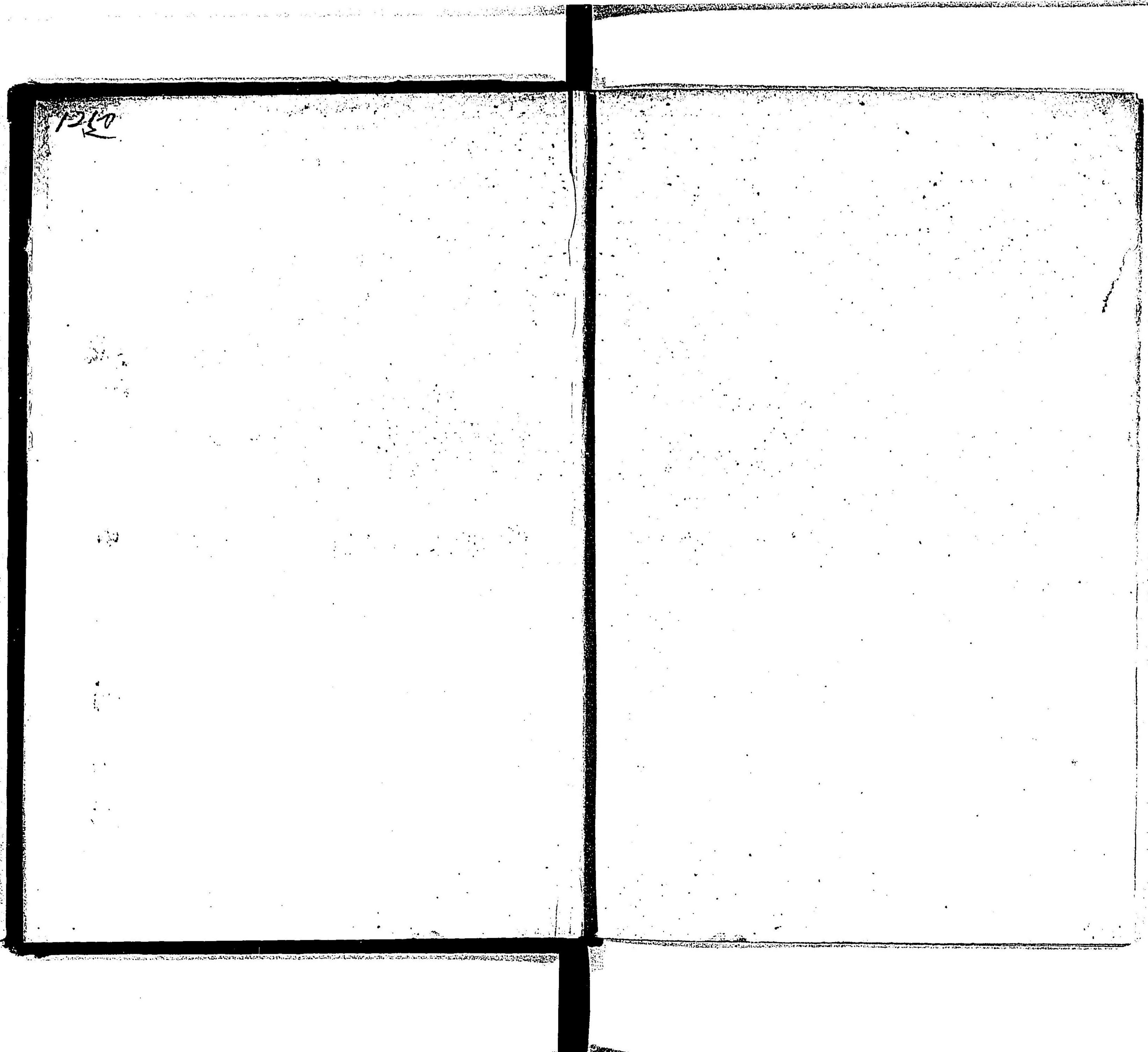
本會會長  
本會評議員

東京帝國大學文科大学教授  
東京帝國大學農科大学教授  
東京帝國大學農科大学教授  
東京高等師範學校校長  
早稻田大學學長  
早稻田大學教授  
東京帝國大學文科大学教授  
早稻田大學教授  
東京帝國大學農科大学學長  
東京帝國大學工科大学教授  
「日本及日本人」主幹  
東京帝國大學文科大学教授

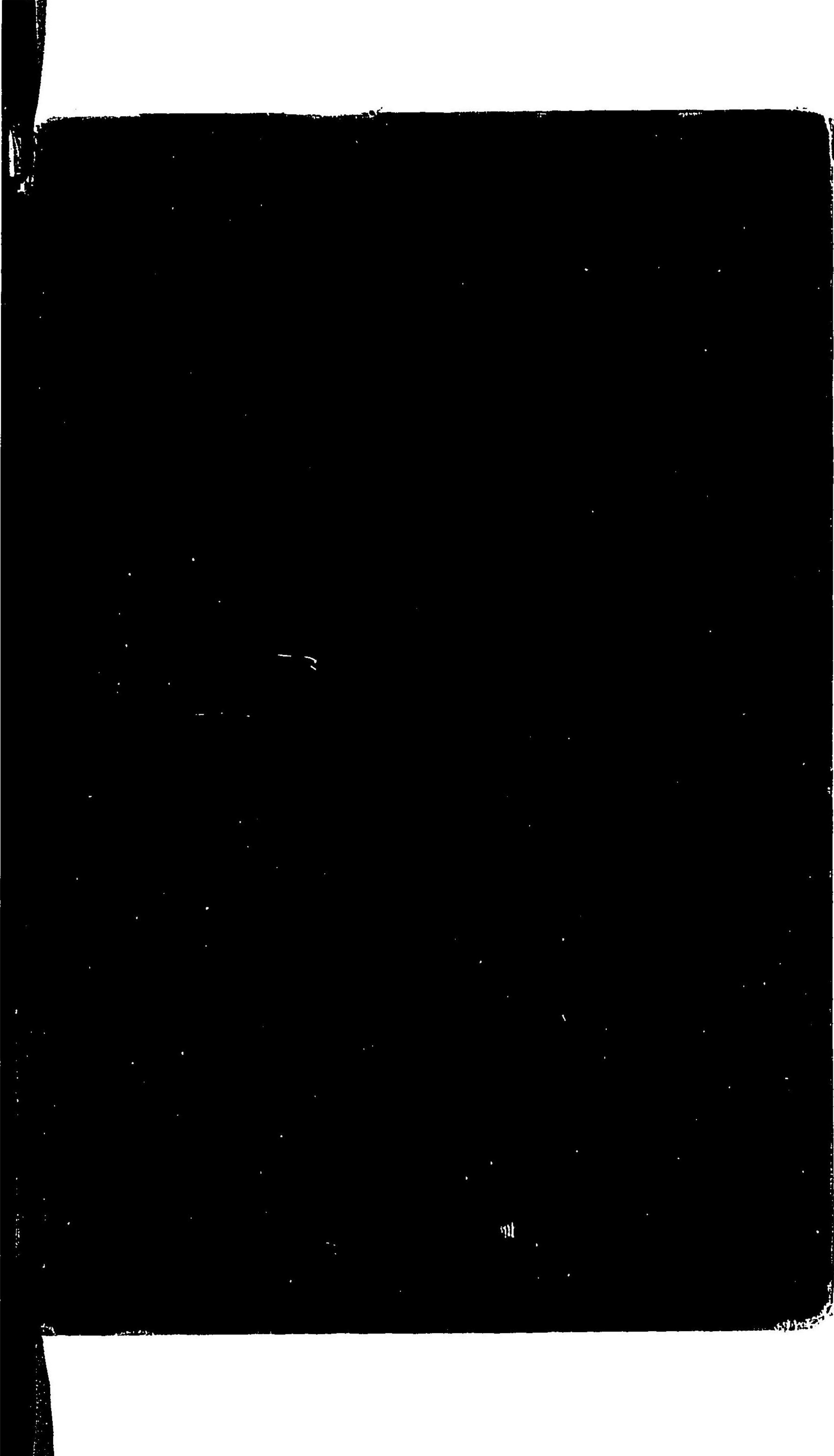
伯爵 大隈重信

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士
井上哲次郎	石川千代	和田垣謙三	嘉納五郎	高田早苗	坪內雄	上田萬藏	浮田和年	松野直吉	眞宅文二	三元良次	浮山重和	杉山義藏	江藤哲次	磯部保次

本會編輯長  
本會編輯主任  
本會理事  
本會同業理事



12 ✓



084798-000-0

901.9-cL83hT

比較文学史

フレデリック・ロリエ/著

M43

DBA-0143

